

# 三島中洲

Chushu

近代と

Modern

其五



二松學舎創立一四〇周年記念

平成二九年度 二松學舎大学資料展示室 企画展図録

三島中洲と近代 — 其五 —

— 二松學舎の漢学教育 —

## 「漢学大意」

『二松學舎舎則』明治二十二年（1879）

漢学ノ目的タル、己ヲ修メ人ヲ治メ、一世有用ノ人物トナルニ在テ、記誦詞章ノ一儒生トナルニ在ラス。故ニ仁義道德ヲ以テ基本トナサ、ル可ラス。是經書ノ課アル所以ナリ。又古今時勢ノ變遷制度ノ沿革ヲ知り、變通ノ才ヲ長セサル可ラス。是歴史ノ課アル所以ナリ。然ルニ其学ヲ事業ニ施サント欲スレハ、文章ヲ借テ、之ヲ暢達セサル可ラス。若シ又當時ニ不遇ニシテ事業ニ施ス能ハサルモ、文章ヲ借テ其学ヲ所ヲ伝ヘ、天下後世ノ用ニ供セサル可ラス。故ニ文章ハ遇不遇ニ関セス、其学ヲ活用スルノ器具ナレハ、必ス之ヲ学ハサル可ラス。是文章ノ課アル所以ニシテ、之ヲ学ヘハ軌範ヲ古今ニ取ラサル可ラス。是諸子又ハ文集ノ課アル所以ナリ。

## はじめに

二松學舎大学 教授 町 泉寿郎

今回の企画展「三島中洲と近代―其五―」では「二松學舎の漢学教育」と副題して、明治期に三島中洲が二松學舎その他で行っていた経・史・子・集、及び日本漢籍等の講義を具体的に展示してみることにした。本学は本年創立一四〇周年を迎え、再来年には中洲歿後一〇〇年を迎える。今や学祖三島中洲の講義を受講した人は現存せず、中洲の講義を受講した人々の記録も風化しようとしている。昨年・本年と夏目漱石のことが喧伝され、その漢学にも一定の関心が集まったが、今後の研究の深化にはほぼ同時期、一八八〇年代に机を並べた人物たち、例えば文学関係では落合直文・長尾楨太郎・山田準・児島献吉郎らにも関心を振り向ける必要があるだろう。また漱石世代に限らず、続く一八九〇年代、一九〇〇年代、一九一〇年代と、日清・日露両対外戦争、第一次世界大戦など激動する世相の中で、二松學舎の漢学がどのように変わったのか或いは変わらなかったのかを問うことは、近代漢学の実態と意義を考える上で有効性をもつと思われる。

従来、中洲の経子解釈としては、各種の雑誌に活字化された講義録や単行本のほか、いわゆる「私録」シリーズが写本の形で残されている。これに加えて、現在進行中の研究プロジェクト、私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「近代日本の「知」の形成と漢学」によって、明治期在塾生の資料収集が促進し、中洲及び同時代の漢学者たちの講義の様子が具体的に分かるようになった。例えば「四書集注」の場合、「私録」や活版としてまとめられる前段階の資料が多数残されている。中洲自身の書入れが残る版本は彼が講義に使用したものに相違なく、その講義を聴講した塾生たちの書入れが残る小松版四書も複数残っている。中洲が講義を重ねるなかで、聴講する有力門人によってその解説が一書にまとめられていったが、「私録」以前に「私記」と名付けられた講義録があったことも明らかになった。一方、塾生側から見れば、中洲の講義だけでなく斯文学会等の講義も聴講している事実は、数年間の在塾中に経史子集すべての主要漢籍を中洲から学ぶことは困難であり、二松學舎に在塾して中洲の講義を聴講しながら、併行して斯文学会等の講座を聴講することが効果的であったことが分かる。

詩ニ至テハ、必用ナラサルカ如シト雖トモ、是亦文章ノ一端ニテ言志ノ用アレハ、其課ヲ廢ス可ラス。於是經史子集、及ヒ詩文ノ諸課備ハリテ、其目的タル、亦唯世間有用ノ人物トナルニアレハ、書ヲ読テ尋常摘句ニ陥ラス、詩文ヲ作テ彫虫篆刻ニ流レサルヲ肝要トス。

且漢籍汗牛充棟、右諸課僅々ノ教書ニ尺ルニ非スト雖モ、今也洋学大ニ行レ、其窮理法律技術等ノ精密ニ至テハ、漢学ノ能ク及フ所ニ非ス。苟モ有用ノ学ニ志スモノハ、洋籍モ亦兼学ハサル可ラス。故ニ漢学ノ課ヲ簡易ニシ、洋籍ヲ学フノ余地ヲ留ルノミ。

若シ漢学ヲ專業ト為サントスルモノハ、群書涉獵固ヨリ望ム所ニア、課外質問ノ設ケアル所以ナリ。

凡テ本舎ニ入り学問スルモノハ、此大意ヲ了シ、然ル後順次課業ヲ修メ、一世有用ニ人物タランコトヲ、是希望ス。

中洲の二松學舎における漢学教育の基本は、明治一二年の「漢学大意」（『二松學舎舎則』）に示されている通り、漢文の講読や作詩文を通して、論理性や分析力といった「読み書き」能力を身に付けさせるものであった。今回の展示品に見られるように、中洲の講義は大段落・小段落など段落を分け、文章全体の趣意と文章の構成を分析的に解説するものであった。こうした読解法は、富山房「漢文大系」に収録された『唐宋八家文読本』のような名文選に適合したので、従来、中洲の講義はそれによって知られてきたが、彼はあらゆるテキストに対してこの姿勢を維持している。このことは中洲が古典解釈において何ら獨創性を持ち合わせなかったことを意味するものではなく、あくまで彼の漢学教育が言語教育を主とし思想教育を従とするものであったことを示すものである。また、一方で帝国大学文科大学における高等教育としての漢学が考証学に舵を切っていく時期にあつて、中洲が中等教育における国語の一翼としての漢文の範疇を十分に理解していたことを示すものである。この見通しがあるからこそ、彼は「漢学大意」において、洋学が諸分野において漢学より優れている以上、「一世ニ有用ノ士」となるには洋書の兼学が必須であるから、漢学の課を簡易にしたと明言するのである。こうして高等教育・中等教育の漢学が形成されたことは、近代における漢学の変容と解体のさまをよく示している。

今回展示する在塾生たちの資料によって、中洲が講義の際に、どのような先行文献を参照したかが具体的に明らかになったことも重要である。経書解釈に関して概観すれば、古注・新注・明清の注解、ならびに日本人の注解を兼学した折衷学の様相を示し、安井息軒・塩谷宕陰らのような直接交流のあつた先人の説も多く引用している。「文」に関して言えば、中洲が師事した山田方谷・斎藤拙堂のほかに、森田節齋や藤森弘庵らの存在も浮上してきた。大和出身で芸備地方を中心に活動して勤皇思想を鼓吹した節齋は、頼山陽門下に出て独特の風格を持った人物として知られる。中洲は節齋と幕末期に交流を持ったばかりでなく、明治以降も節齋門下の片山猶存等を通して頼山陽・森田節齋の系譜につらなる文論を継承していたと見ることができよう。

今回の展示が、三島中洲の学問と二松學舎の漢学教育を問い直すための素材提供の機会となれば幸いである。創立一五〇周年を視野に入れつつ、内容の本格的な検討はこれからの仕事である。

平成二九年一月

三島中洲と近代 ―其五―

二松學舎の漢学教育

はじめに(町泉寿郎)

目次

I 経書―五経

周易講義、周易私録

尚書講義筆記、尚書私録、尚書古今文九家系表

詩経講義、詩経、詩集伝私記、詩集伝私録

礼記講義

左伝講義、春秋左氏伝諸家説

..... 5

―四書

手沢本四書集註(三島中洲、三島復、松浦精、加藤復斎)

大学私録、中庸私録、学庸私録、論語私録、孟子私録

古本大学、中庸、古本大学講義

論語講義、論語補解

孟子講義、魏批孟子牽牛章

..... 10

II 史 書

史記論贊、史記論贊鈔、史記講義、史記論贊講義

日本外史論贊

日本政記論文段解、日本政記論贊

増補元明史略、皇朝史略

..... 16

III 子 書

荀子箋釈、近思録講義、伝習録講義

韓子解詁、韓非子講義

孫子講義

老子講義、老子私録、莊子講義

..... 19

IV 総集・別集

増纂評註文章軌範、文章軌範講義、評本文章軌範、補註文章軌範校本

唐宋八大家文読本講義、点註唐宋八大家文読本、唐宋八大家文読本

節齋遺稿、堯江文鈔

..... 22

V 二松學舎塾生たちの文社

風水文社文稿

東海北斗

加藤復斎の日記

..... 26

VI 三島中洲と二松學舎ゆかりの漢学者たち

佐藤一斎、山田方谷、齋藤拙堂、土井賢牙、森田節斎

片山猶存、川田堯江、三島中洲、土屋鳳洲、細田劍堂

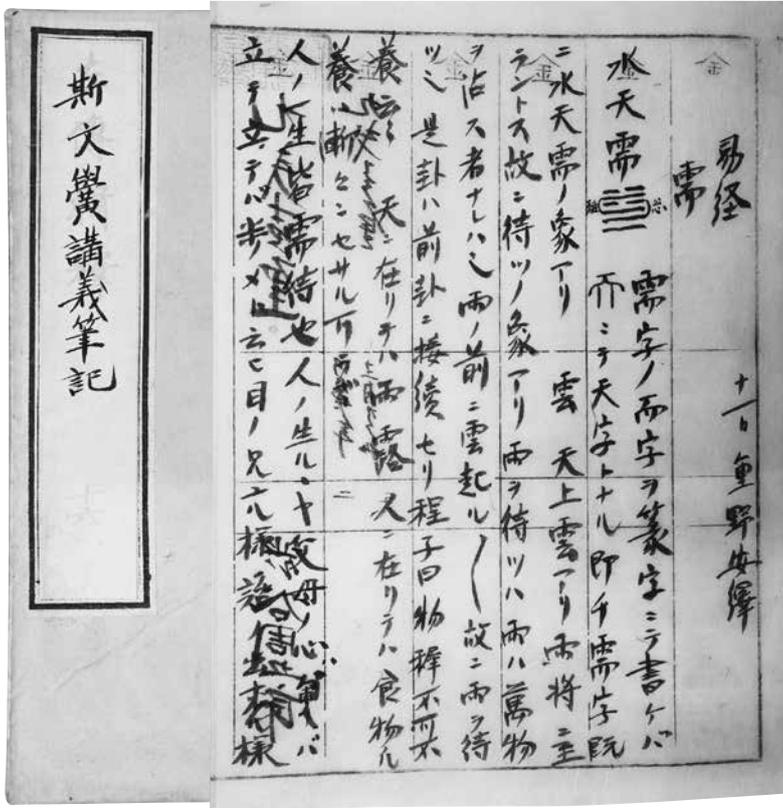
頼山陽、猪飼敬所

..... 28

凡例

- 一、本書に収録した資料のうち、二松學舎大学所蔵資料には、請求記号・整理番号等を略記し、それ以外(個人蔵)には通し番号の前に☆を付した。
- 二、本書に使用する漢字の用字は、常用漢字体など通行の字体を基本とした。
- 三、人物の呼称は基本的に姓号を用いるが、汎用される姓名等を用いた場合もある。
- 四、図版解説は、5〜24ページまでは清水信子が、25〜36ページまでは町泉寿郎が分担執筆した。
- 五、本書は二松學舎大学の大学資料展示室の企画展「三島中洲と近代―其五―」(展示期間二〇一七年二月四日〜三日)の展示図録を兼ねるものである。

明治期、二松學舎において經書は、まず素読の教材として四書五經が用いられ、その後高等課程に上った段階から「經書」課目として具体的に内容を学んでいった。例えば明治29年(1896)の高等部課程表によれば、第1年第1期の『論語』にはじまり、第2期は『大学』『左伝』、第2年第1期『中庸』『左伝』、第2期『詩經』、第3年第1期『書經』と進み、第2期の『周易』に終わる。



## 1 重野成齋述 加藤復齋録「周易講義」

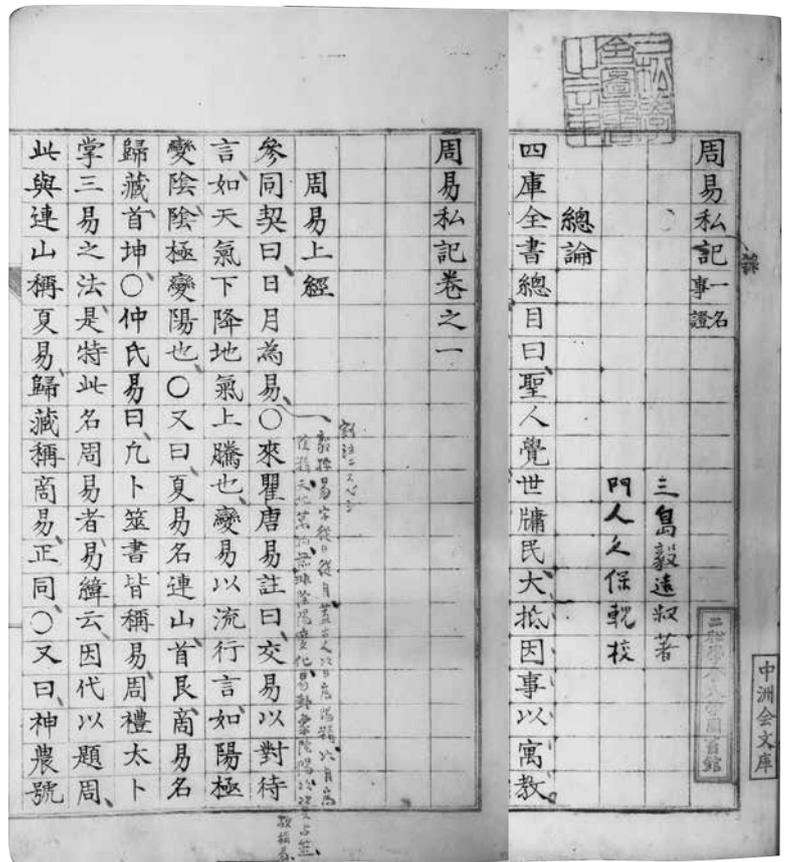
(加藤復齋録『斯文覺講義筆記』所収)  
加藤復齋自筆本 1冊(復齋056)

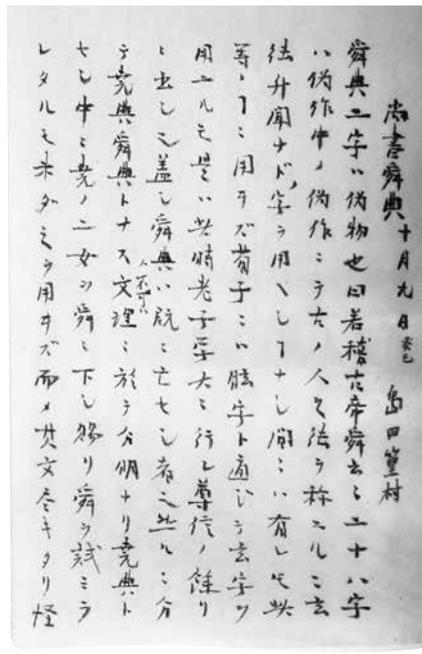
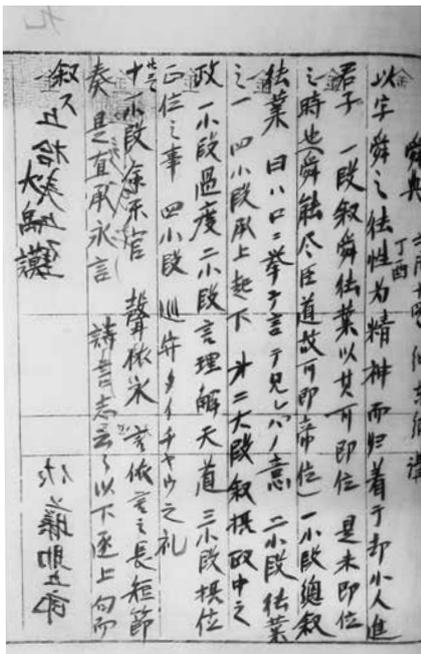
『斯文覺講義筆記』は加藤復齋(生没年不詳、名は信太郎、p.27参照)が斯文覺での明治26年(1893)から明治30年(1897)までの講義筆記をまとめたもので、重野成齋(1827~1910、名は安繹)による「周易講義」は明治29年に開かれたものである。このほか、南摩羽峯(1823~1909、名は綱紀)による『詩經』、萩原西疇(1829~1898、名は裕)による『春秋左氏伝』、岡松甕谷(1820~1895、名は辰)、川田甕江(1830~1896、名は剛)による『礼記』、根本羽嶽(1822~1906、名は通明)による『論語』、田中從吾軒(1822~1900、名は參)による『老子』、土屋鳳洲(1842~1926、名は弘、p.35参照)による『近思録』の講義筆記が著録される。塾生は在塾中、二松學舎での講義と併行して、斯文覺の講座も聴講していたことが知られる。

## 2 三島中洲著 久保靱校『周易私録』

久保靱自筆本 8冊(和装本0120)

中洲は嘉永5年(1852、中洲23歳)から安政3年(1856、27歳)にかけての伊勢津藩遊学中から「私録」と題した漢籍注釈書を手がけている。『周易』のほか『尚書私録』『詩集伝私録』『大学私録』『中庸私録』『論語私録』『孟子私録』『老子私録』があり、明治38年(1905)に全38冊が完成した。展示資料は校録者久保靱(また河合靱次郎、大車、信齋と号す、生没年不明)の手になり、中洲により朱筆補訂が書き入れられた草稿本で、成立時期は不明であるが、その体裁から後出『尚書私録』『孟子私録』と同時期と思われる。久保靱は、塾頭、漢文講師と長きにわたり二松學舎に務めた人物で、中洲の「私録」シリーズの多くを録している。各種「私録」は巻頭に概説をおき、本『周易』と後出『尚書私録』『詩集伝私録』の場合、「総論」と題してまず四庫全書総目提要を引く。注解は多くを程伝本義により、その他諸注を折衷している。

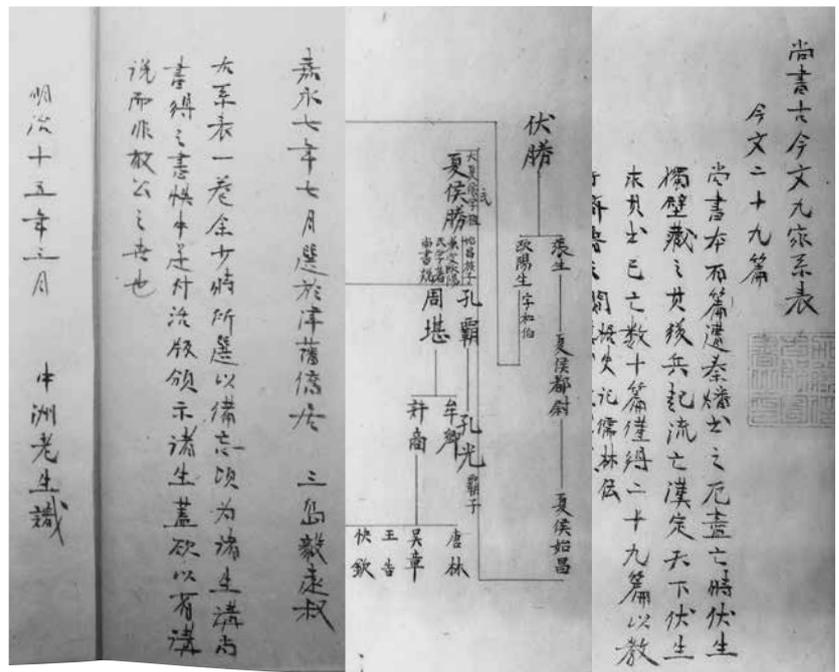




3 | 三島中洲・島田篁村・細田劍堂述 加藤復齋録『尚書講義筆記』

加藤復齋自筆本 1冊 (復齋005)

明治25年(1892)4月10日から明治32年(1899)5月18日までの『尚書』の講義筆記を、受講後あらためて時系列ではなく、概ね篇ごとにまとめたもの。講述者として島田篁村(1838~1898、名は重礼)、細田劍堂(1858~1945、名は謙蔵、別号東郷、p.35参照)の名が明記されているほか、日付のみ記載された講義録は、復齋の日記によれば中洲の講義を筆記したもの。

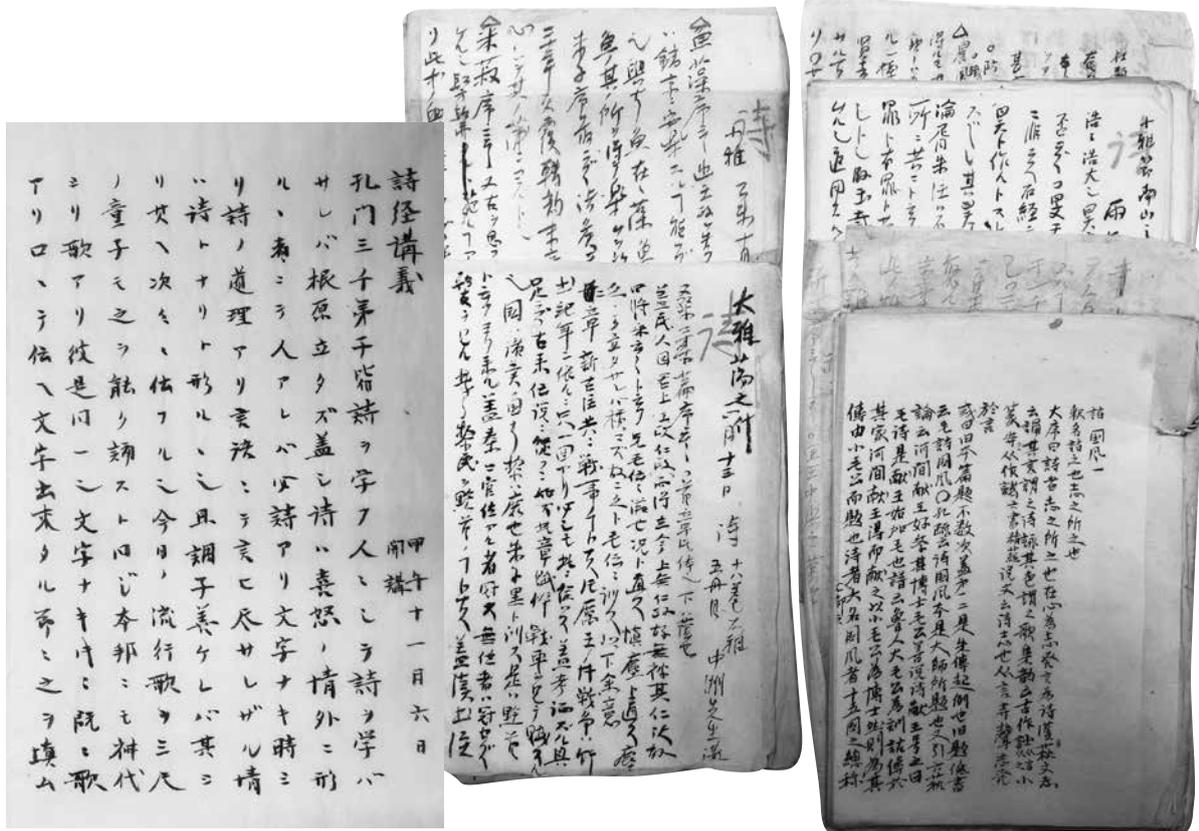


左: 4 | 三島中洲著 久保鞆録『尚書私録』 久保鞆自筆本 10冊 (和装本0121)

中洲の「私録」シリーズのひとつ(前出『周易私録』参照)。注解は蔡伝により、その他諸注を折衷している。

右: 5 | 三島中洲著『尚書古今文九家系表』 加藤復齋写本 1冊 (復齋006)

『尚書』今文古文九家「今文二十九篇」「偽泰誓一篇」「古文五十七篇」「張霸百兩篇」「漆書古文一篇」「中文尚書」「偽古文五十九篇」「姚方輿偽古文二十八字」「豊熙偽古文」について概説する。成立は中洲が津藩遊学中の嘉永7年(1854)。その後、明治15年(1882)に刊行されたが、その刊行版は現存を見ない。



6 | 三島中洲述 加藤復齋録『詩経講義』 加藤復齋自筆本

左：仮綴1冊（復齋507） 右：仮綴5冊（復齋504）

504は明治27～同28年（1894～95）にかかると『詩経』講義筆記。時期により筆蹟、用箋が異なる。507は明治32年（1899）の講義筆記。

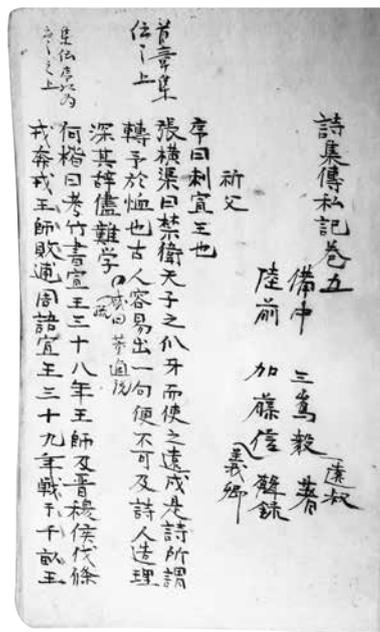
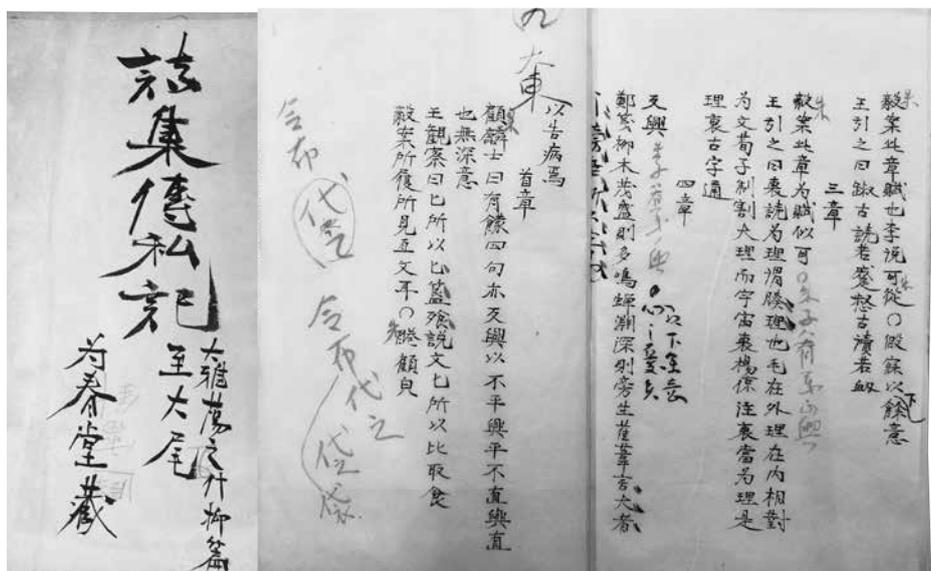


7 | 宋・朱熹集註『詩経』8巻（巻1 闕） 江戸期刊本 加藤復齋手沢 存7冊（復齋008）

加藤復齋による朱筆、墨筆、藍筆の詳密な書入は、中洲の講義に基づくもので、中洲の按語をはじめとして毛伝、孔疏など中国諸家注、また日本諸家からは仁井田好古（1770～1848、南陽と号す）『毛詩補伝』（1834刊）、中井履軒（1732～1817、名は積徳）『詩経離題略』（未刊）からの引用が散見する。

8 | 三島中洲著 加藤復齋輯録『詩集伝私記』『詩集伝私録』

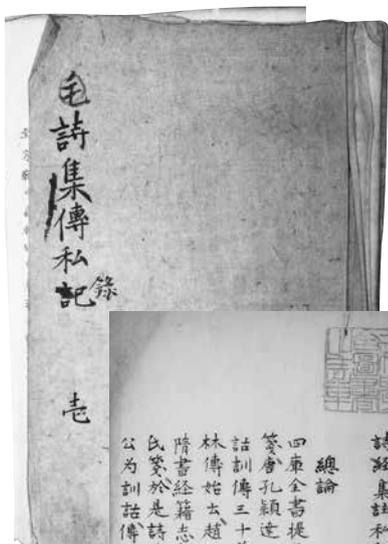
加藤復齋自筆本



左：仮綴1冊（復齋502）前半部は鉛筆による筆記。「為春堂」は復齋室号。

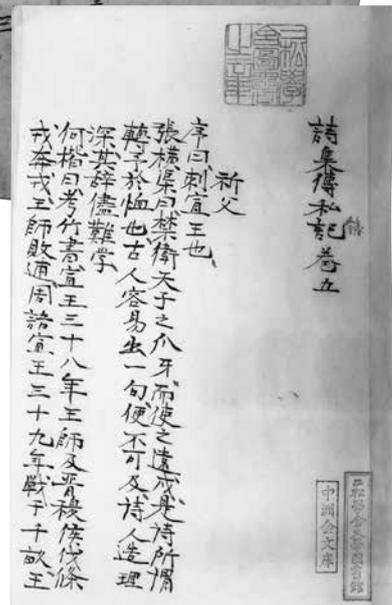
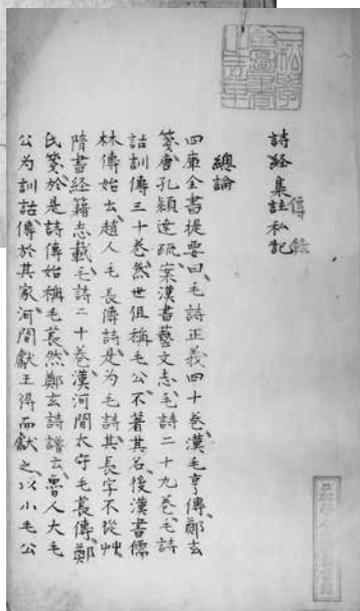
右：仮綴1冊（復齋503）用箋は大小混在。

中洲「私録」シリーズのひとつ（前出『周易私録』参照）。朱熹集伝をもととし、鄭箋、孔疏はじめとした諸注を折衷するなか、前出の『詩経』書入と同じく仁井田好古、中井履軒の説が頻出し、それらがこの私録に続くことが知られる。録した人物についてはこれまで不明であったが、このたび新収の加藤復齋旧蔵本に「三島毅遠叔著／加藤信義卿輯録」と明記されていることにより、加藤信、すなわち復齋であることが判明した。また下掲和製本0103、0117の書者についても、筆跡の一致により復齋の筆であることが明らかとなった。成立過程については、書名「私記」が、0103、0117は「私録」と訂正されていることから、復齋旧蔵本が最も初期の草稿で、次いで該本と著録内容がほぼ一致する0117、次いで明治32～34年（1899～1901）に成った0103となる。



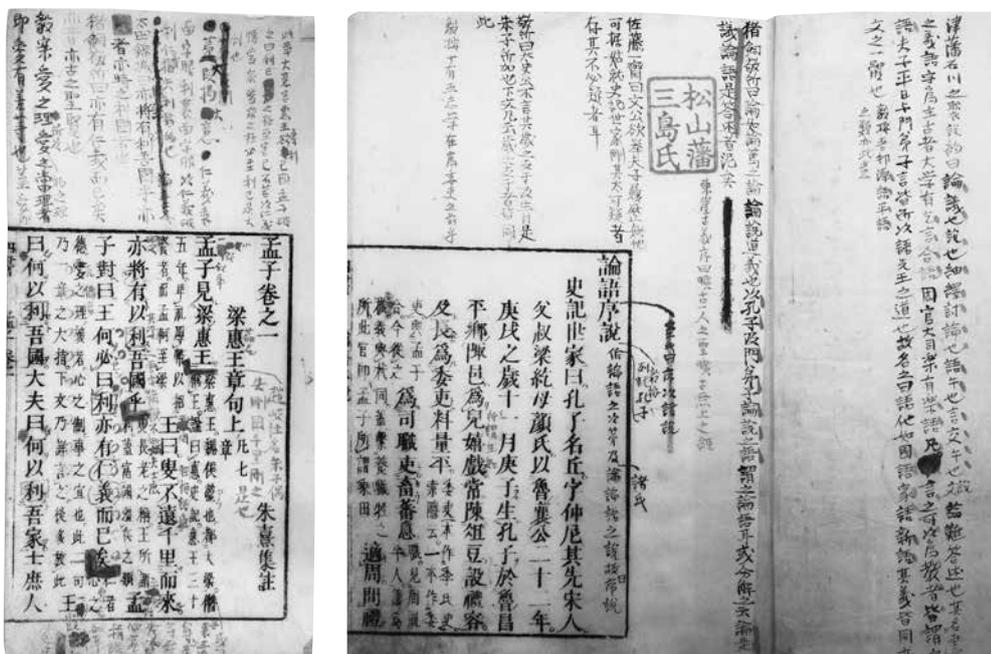
左：仮綴1冊（和装本0103）

右：仮綴8冊（和装本0117）





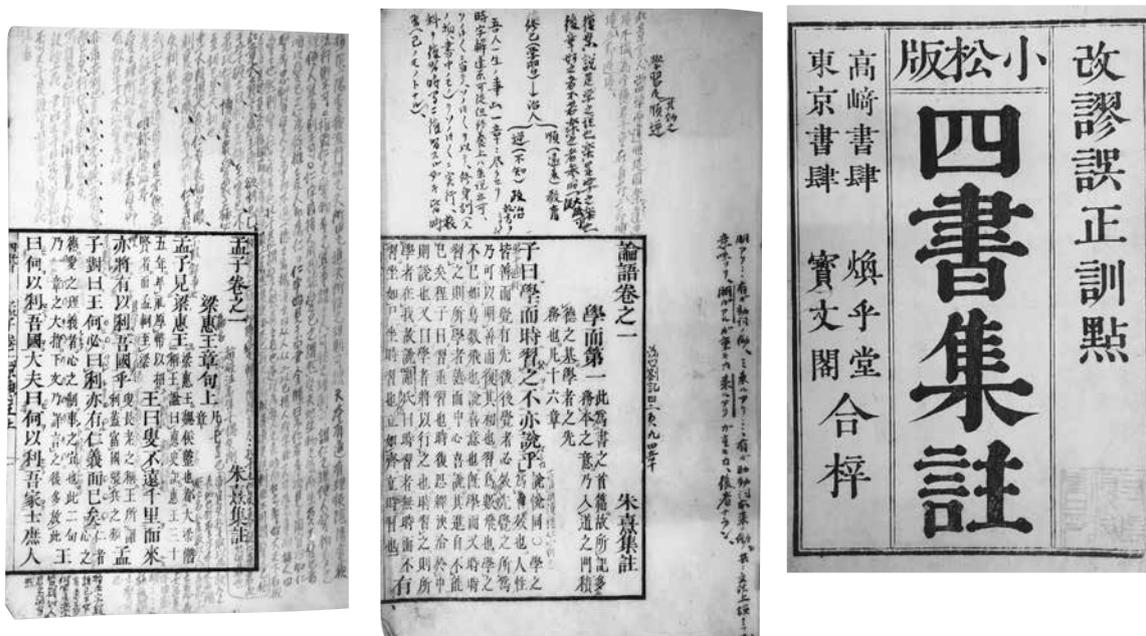
中洲が研究、講義にあたり定本とした四書は、京都の小松太郎兵衛が寛文11年(1671)に刊行した『四書集註』、いわゆる「小松版四書」をもとにした天保8年(1837)江戸須原屋茂兵衛京都吉野屋仁兵衛大坂河内屋喜兵衛刊本で、小本(約17×12cm)として刊行された小松版を半紙本(約24×17cm)で刊行したため、匡廓外が広くとられている。そのため書入の便が良く、中洲はじめその門人たちに多く活用された。なお、のちの明治13年(1880)重刊本の見返しには「小松版」とある。



### 12 | 三島中洲手沢本『四書集註』(存論語10卷・孟子7卷)

天保8年(1837)大坂河内屋喜兵衛等刊本 存4冊(和装本0031)

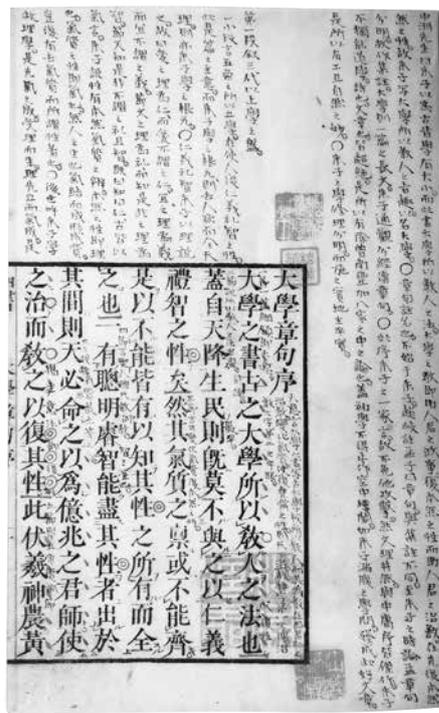
書入は、筆蹟によれば幕末から晩年にわたり蓄積されたもので、中国諸注のほか、猪飼敬所(1761～1845、p.36参照)、佐藤一斎(1772～1859、p.28参照)、石川竹屋(1794～1844、名は之襲)、中井履軒などからの引用が頻出する。それらは各種「私録」につながるものであろう。



### 13 | 三島復手沢本『四書集註』(存大学1卷・論語10卷・孟子7卷)

天保8年(1837)大坂柳原喜兵衛等刊 明治13年(1880)群馬高橋常藏重刊本 存5冊(和装本0059)

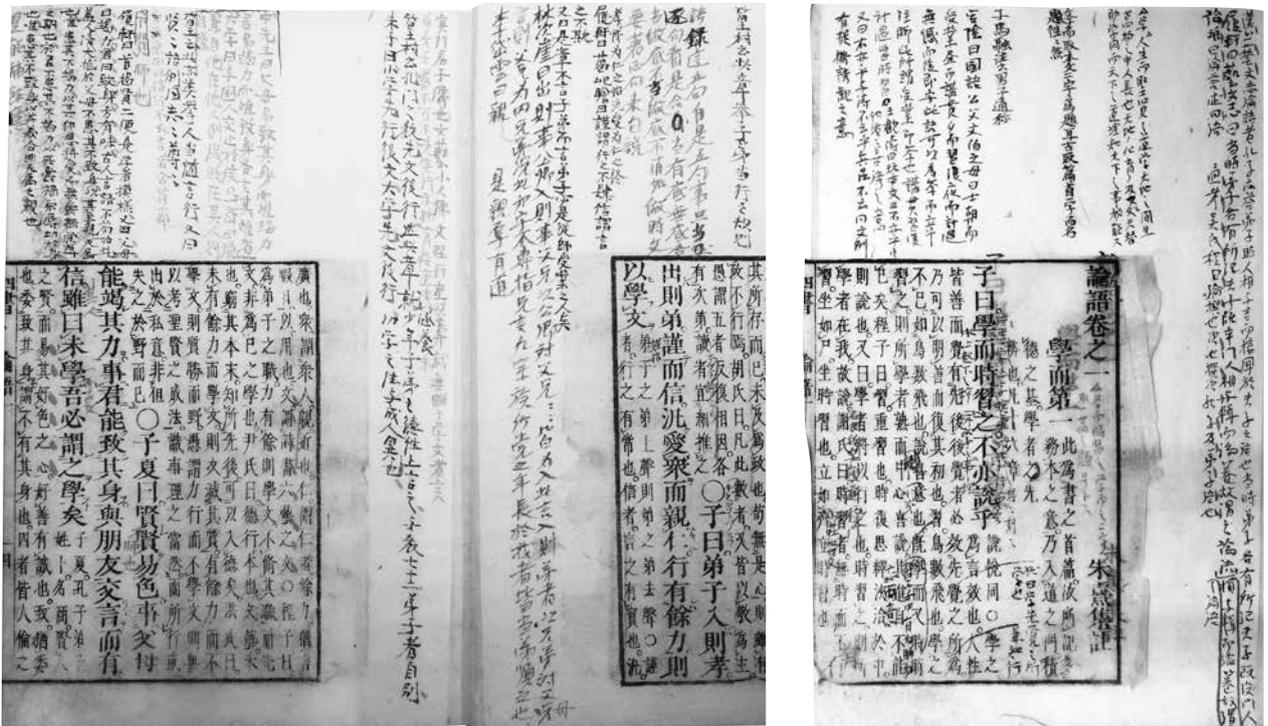
復(1878～1924、雷堂と号す)は、中洲三男。二松學舎で教鞭をとり、兄廣に次いで第2代舎長(1907～19)となる。書入は中洲講義の筆記のほか自身の注記もあり、中洲手沢本との比較が興味深い。末に「明治卅二年 三島復」とある。



14 | 松浦精手沢本『四書集註』

天保8年(1837)大坂柳原喜兵衛等刊 明治13年(1880)高崎高橋常蔵重刊本 3冊(山田文庫I-019)

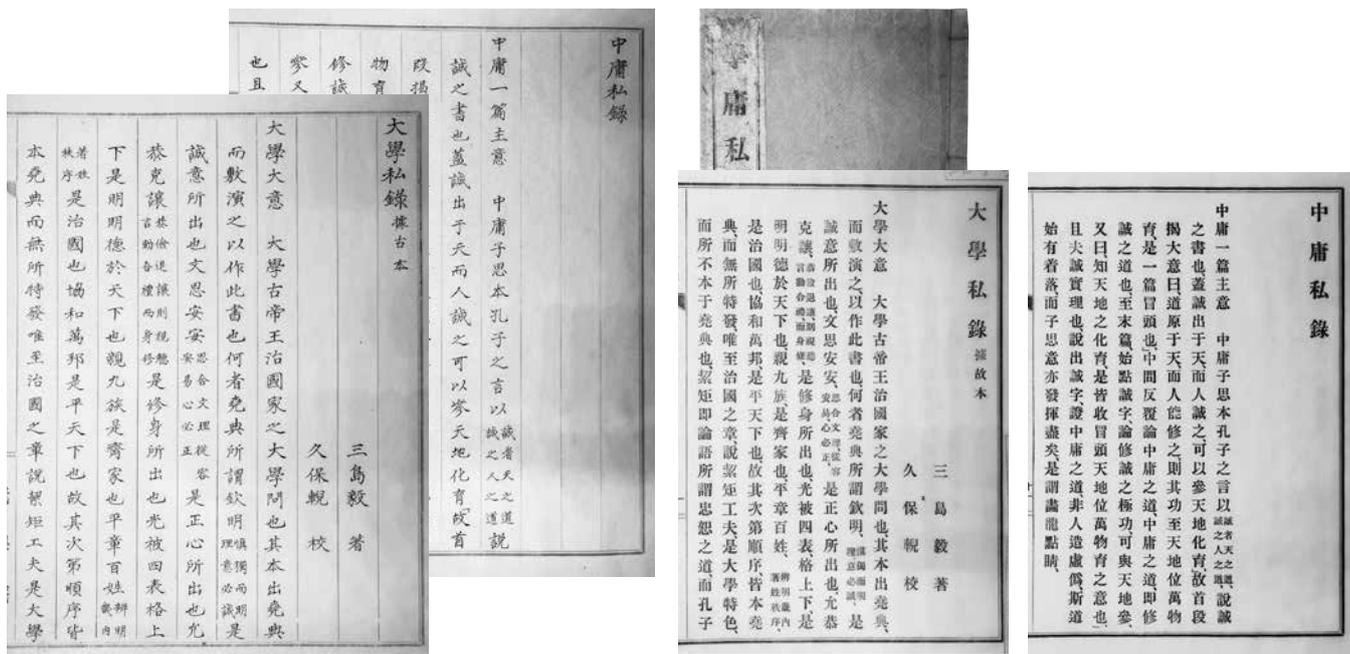
松浦精(旧名小林鳳之進、生没年未詳)は備中足守藩藩士。明治20年代に二松學舎に在塾し、のち仙台第一中學教諭となった人物で、その書入は中洲の講義時の筆記と思われる。のち昭和14年(1939)、書肆松雲堂の店頭にあったその書入本を山田濟齋(1867~1952、名は準)が購入した。



15 | 加藤復齋手沢本『四書集註』(闕中庸、論語卷9、10)

天保8年(1837)大阪河内屋喜兵衛等刊 江戸後期大阪河内屋喜兵衛等後印本 存11冊(復齋047)

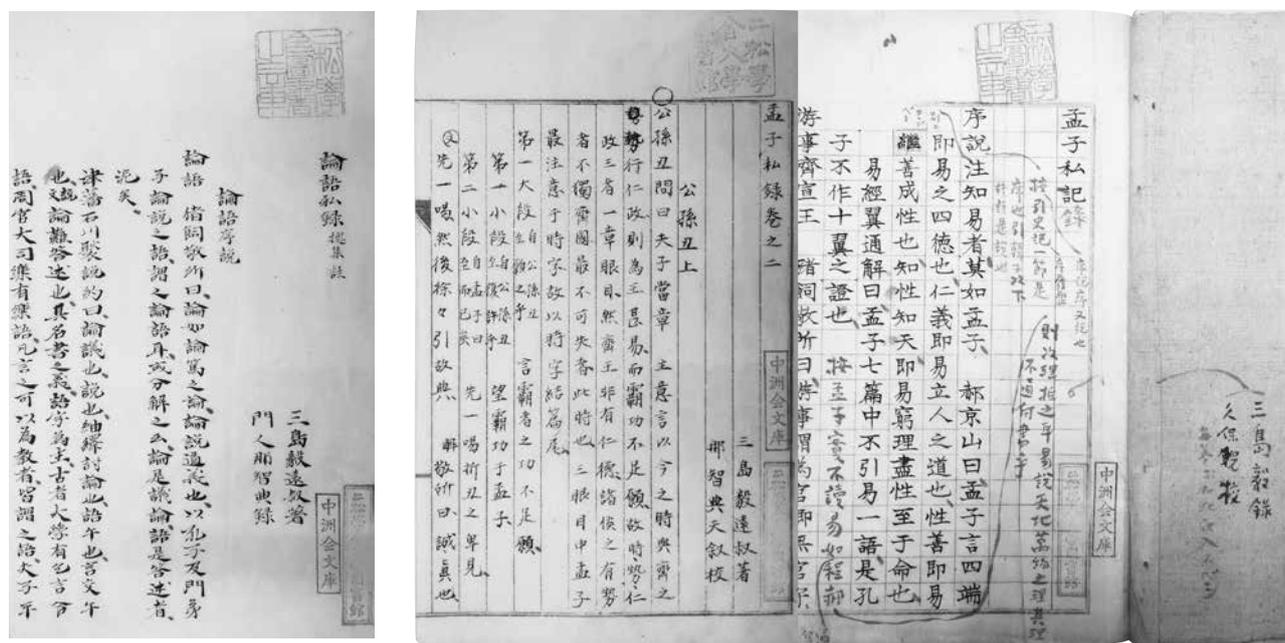
書入は、概ね中洲の講義を筆記したもので、「一大段…」「一小段…」と大段、小段に分けて解説していく、中洲の講義方法が窺える。「大学」末に「二十四年十月廿五日」とある。



左：16 | 三島中洲著 久保靦校『大学私録・中庸私録』 久保靦自筆本 1冊 (和装本0158)

右：17 | 三島中洲著 久保靦校『学庸私録』 明治38年(1905) 東京三島毅排印本 1冊 (和装本0081)

中洲「私録」シリーズのひとつ(前出『周易私録』参照)。匡廓は刷りであるが本文は久保靦による手鈔。明治38年に『学庸私録』として刊行される。『大学』は巻頭にあるように王陽明の「古本大学」により、『中庸』は朱熹章句による面もあるが分章は一致せず。

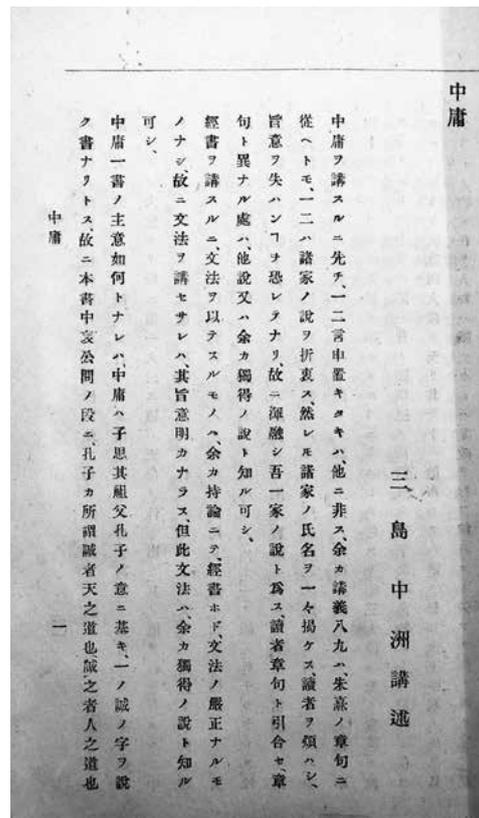
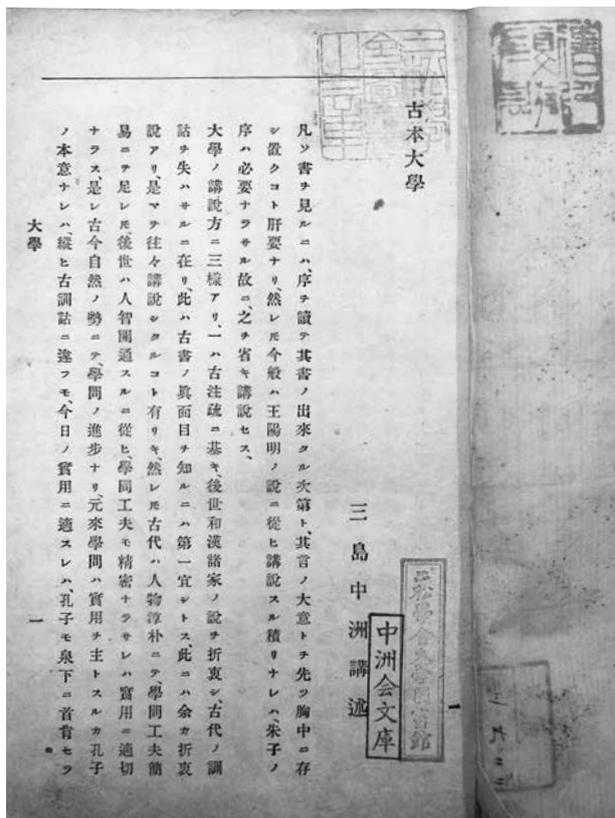


左：18 | 三島中洲著 那智惇齋録『論語私録』 写本 4冊 (和装本0160)

巻首に「拋集註」とあるように朱熹集註により、毎章頭にまづ章意を記す。所引注では猪飼敬所、佐藤一斎、石川之塾が多見し、前出の中洲手沢『四書集註』の書入と合致する箇所が多い。校録者那智惇齋(1873～1969、通称は佐典、また佐伝)は、明治23年(1890)に二松學舎に入り、同27年(1894)に助教となるも翌年辞し、同34年(1901)再び入塾し、塾頭、教授を務め、のち二松學舎第6代舎長(1969)となった。

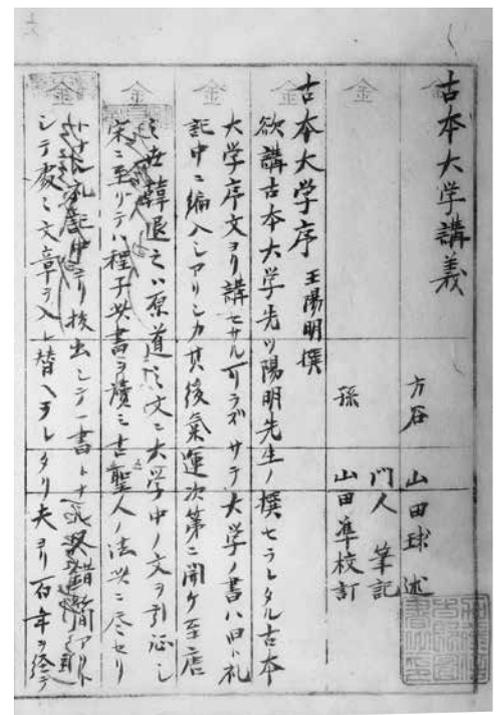
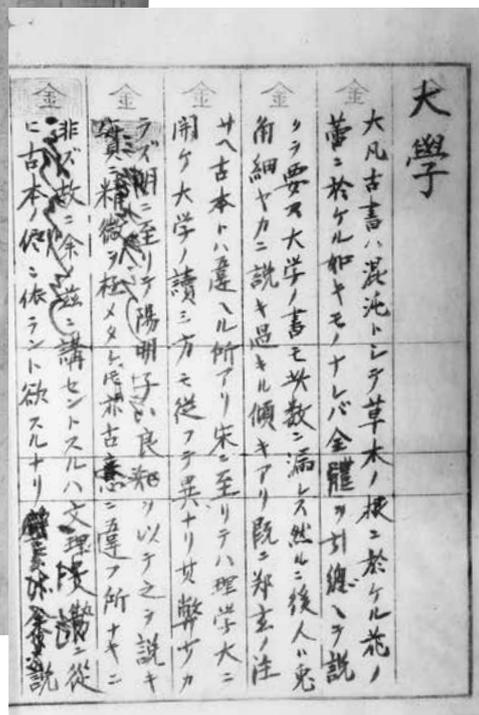
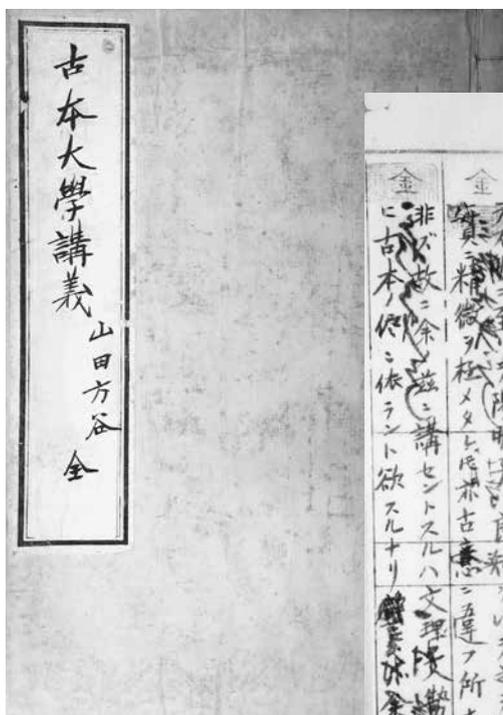
右：19 | 三島中洲著 久保靦・那智惇齋校『孟子私録』7巻 久保靦自筆本 7冊 (和装本0166)

訓詁など基本的には朱熹集註により、諸注を折衷する。本書もまた前出中洲手沢『四書集註』がもとになっており、猪飼敬所、中井履軒などの名が同様に多見する。巻2のみ那智惇齋の校録。



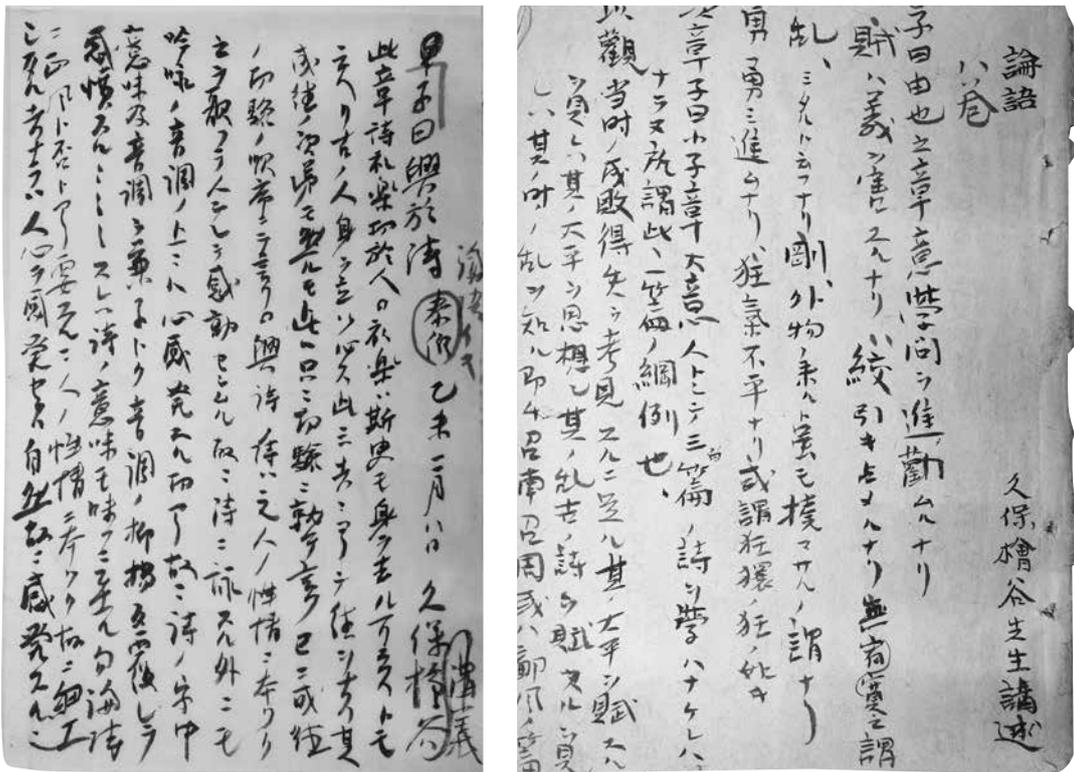
20 | 三島中洲講述「古本大学」「中庸」 (『漢文学講義録』所収) 排印本 (和装本0122)

『漢文学講義録』は、中洲ほか諸氏の講義録を輯めたもので、明治期から大正期にかけて刊行された。本冊にはこのほか萩原西疇の「論語講義」が収められている。なお『中庸』は完結していない。



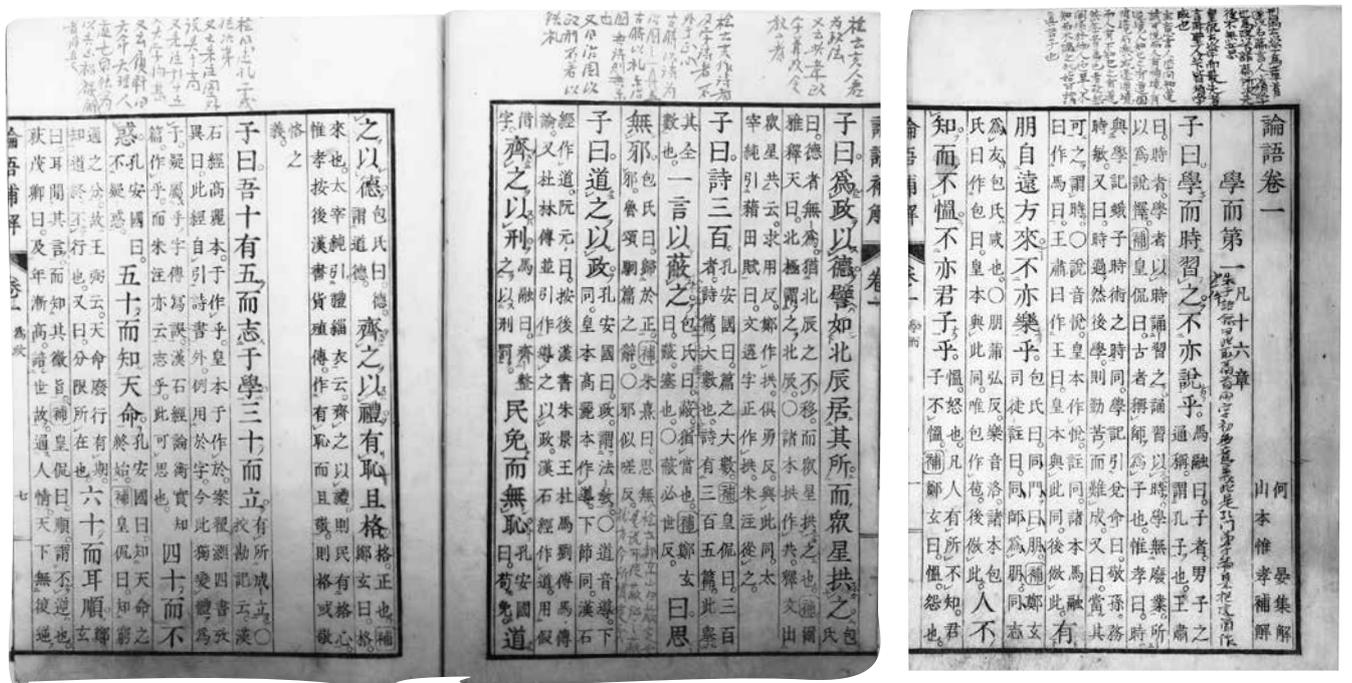
21 | 山田方谷 門人筆記 山田準校訂『古本大学講義』 加藤復斎写本 1冊 (復斎024)

山田方谷 (1877 ~ 1805、名は球) の講義を門人が筆記したもの。書名の通り、王陽明『古本大学』に基づく。



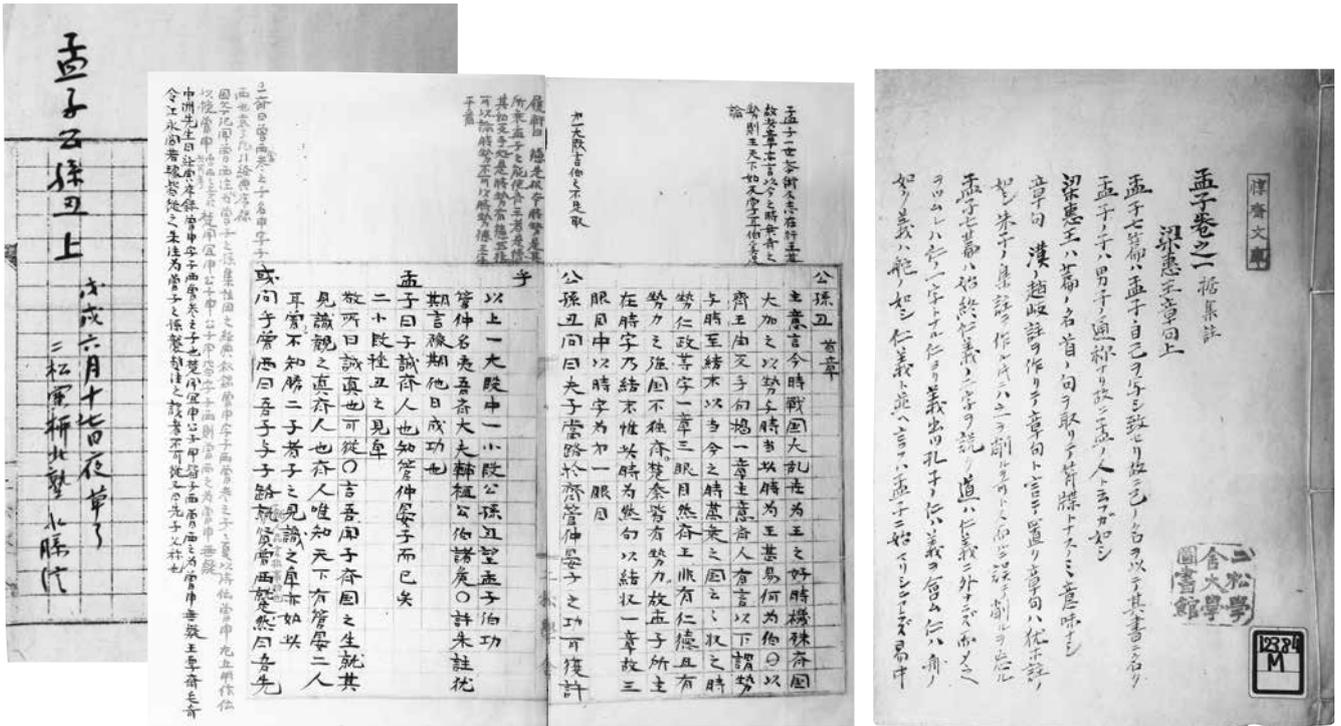
22 | 久保檜谷講述 加藤復齋録『論語講義』 加藤復齋自筆本 仮綴1冊 (復齋518)

久保檜谷 (1861 ~ 1942、名は雅友、p.27 参照) による、明治 28 ~ 同 29 年 (1895 ~ 96) 頃の講義筆記。檜谷は摂津高槻の出身で、明治 14 年 (1881) に二松學舎に入り、塾頭、幹事、また詩文方を務めた人物で、講義は同 17 年から同 29 年 (1884 ~ 96) まで務めた。論語講義はほぼ毎朝 6 時から 7 時には始められていた。



23 | 魏・何晏集解 日本・山本惟孝補解『論語〔補解〕』10卷

天保 10 年 (1839) 紀州和歌山総田屋平右衛門等刊本 加藤復齋手沢 4 冊 (復齋 032)  
書入には「松云…」とあるように、久保檜谷の『論語』講義時の講述も見られる。

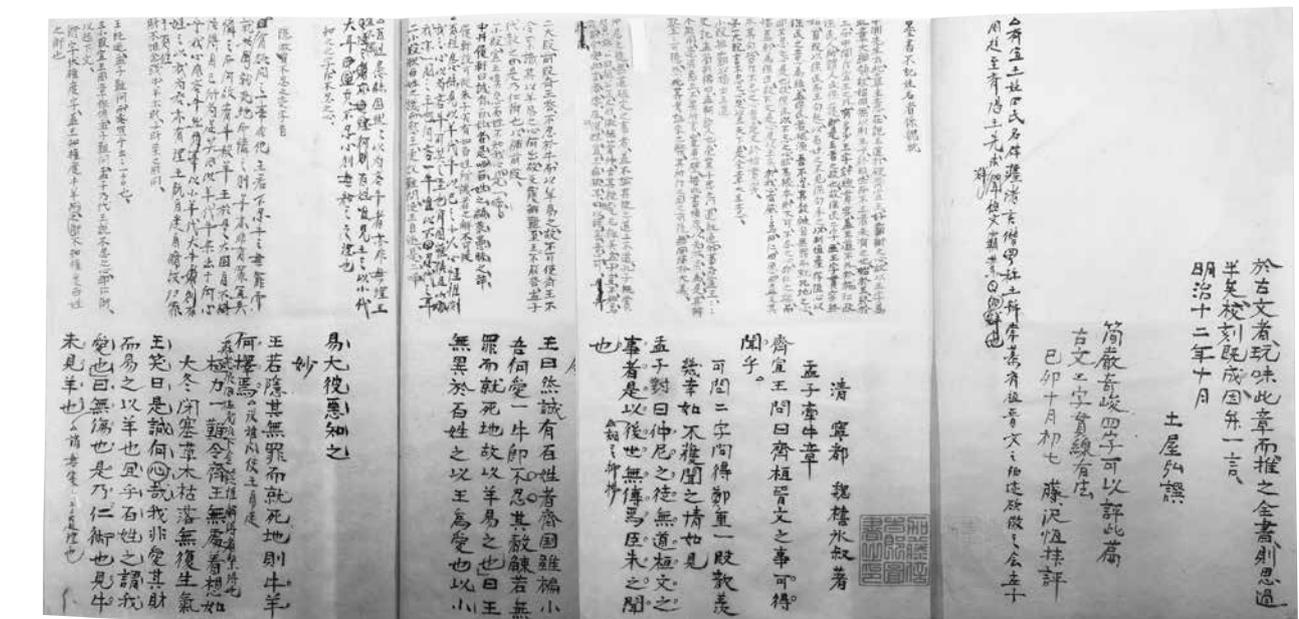


左：24 | 三島中洲述 加藤復齋録『孟子講義』 明治31年(1898)加藤復齋自筆本 仮綴1冊(復齋527)

本文は前出『孟子私録』と重なり、匡廓外の書入は中洲の講説ほか中井履軒、佐藤一斎の引用が頻出する。表紙に「戊戌六月十七日夜草了／二松覺柳北塾 加藤信」とある(「戊戌」=明治31年、「加藤信」=復齋)。

右：25 | 三島中洲述『孟子講義』 写本 仮綴1冊(和装本0110)

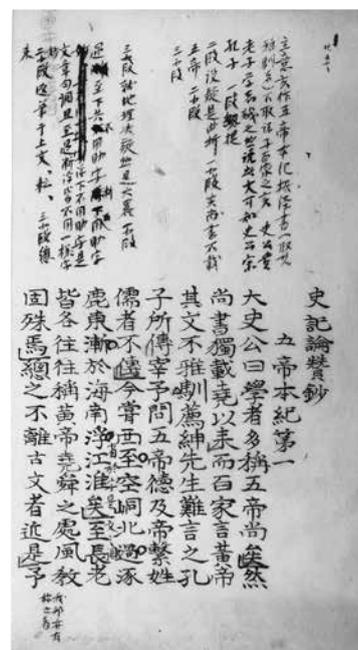
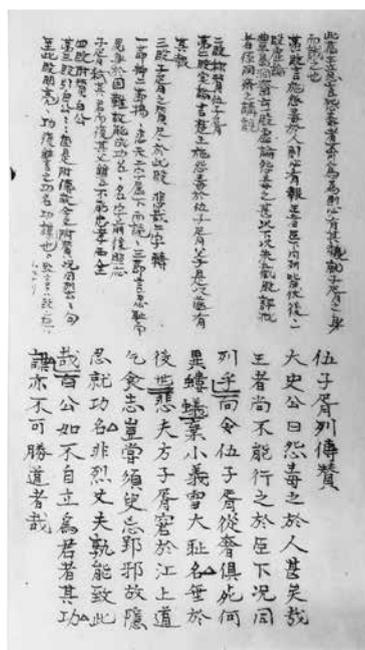
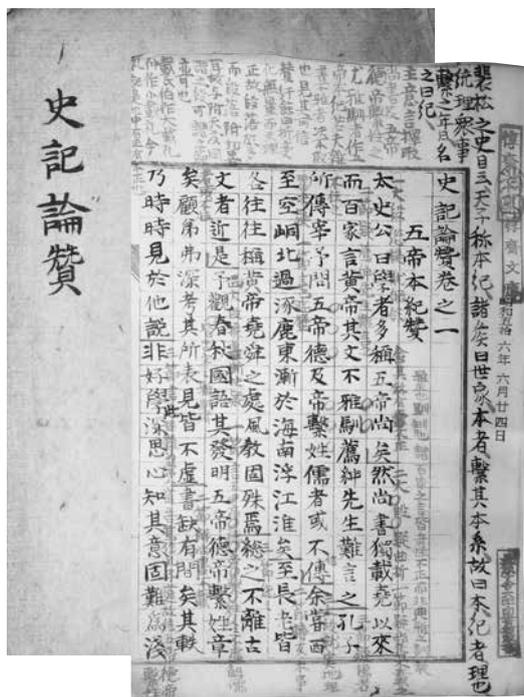
和文で記された講義録。朱熹集註を定本とする。なおまた別に「中洲三島先生口授／門人本城蕢・渡邊弘筆記」とする『孟子講義』あり、北斗文社の『東海北斗』(P.26 参照)に収載される。



26 | 清・魏禧評 森田節齋等批『魏批孟子牽牛章』 加藤復齋写本 1冊(復齋040)

森田節齋(1811～68、名は益、p.32 参照)批『魏批孟子牽牛章』は弘化5年(1848)に刊行される。本書はその後さらに土屋鳳洲、高見岱(1828～80、昭陽と号す)、藤沢南岳(1842～1920、名は恒)等の批を加えたもの。明治12年(1879)の土屋鳳洲(弘)序、片山猶存(1838～95、p.33 参照)跋あり。眉欄の書入は朱墨あり、朱筆は中洲の講義を録したもの、墨筆は批。

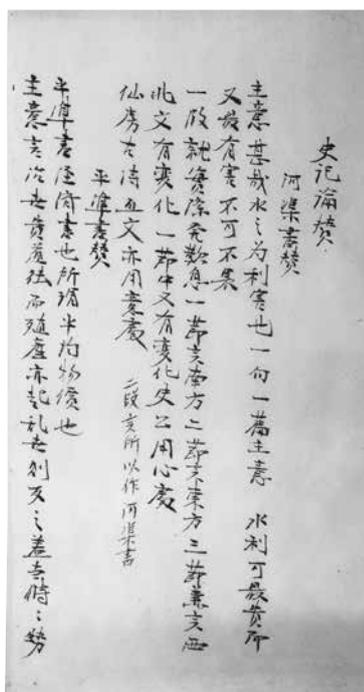
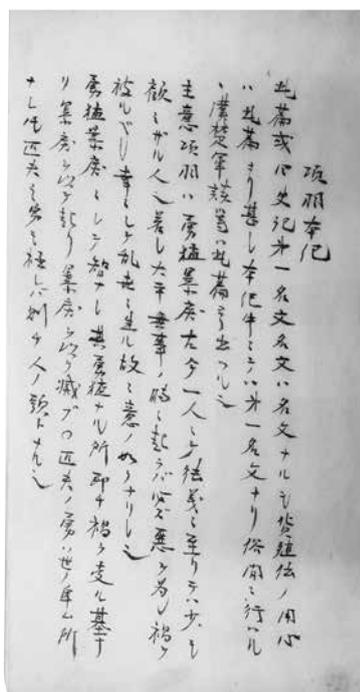
明治20年代の二松學舎の講義において史書は、初等課程における「素読」あるいは「講読」課目として『十八史略』『日本外史』『日本政記』『元明史略』『皇朝史略』『史記』などが読まれた。なかでも中洲は各書の論贊部分に着目して講じ、それらを抽出した各「論贊」シリーズが伝わる。高等課程になると「歴史」課目として『大日本史』『資治通鑑』『宋元通鑑』などが教材として用いられた。



### 27 | 三島中洲著『史記論贊』『史記論贊鈔』

左：写本 仮綴1冊（和装本0111） 中：加藤復齋写本 仮綴1冊（復齋532）  
右：『史記論贊鈔』 加藤復齋写本 仮綴1冊（復齋534）

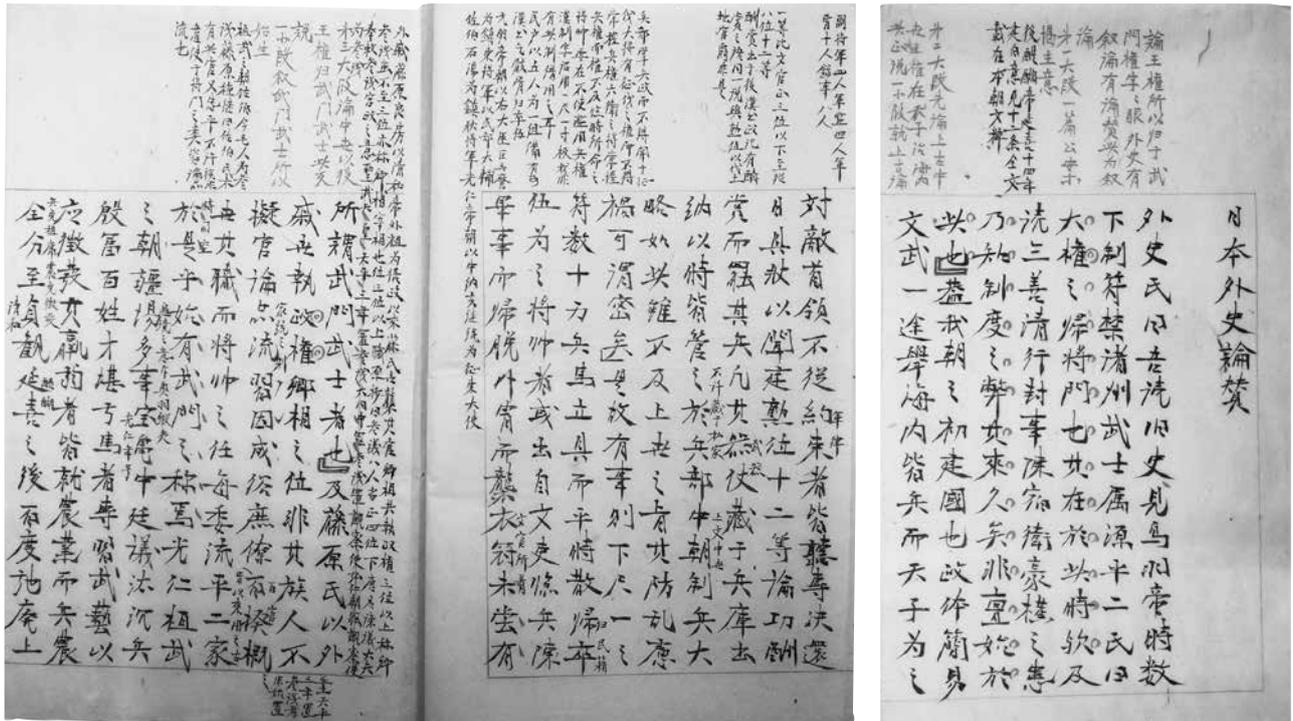
『史記』の論贊部分を輯めたもの。眉欄、行間の書入は中洲の講義時の筆録で、「主意…」としてはじめに主意を掲げ、また「一段…」と段解を示す書入がある。これはのちの『史記論贊段解』につながるものであろう。なお復齋の朱藍書入本の朱筆は、斯文齋で講師を務めた豊島洞斎（1824～1906、名は毅）の説とあり、その講義筆記も含まれる。それら復齋の『史記論贊』講義筆記書入本は複数あり、のちあらためて筆記録として整理されている（次掲）。



### 28 | 三島中洲述 加藤復齋録 『史記講義』『史記論贊講義』

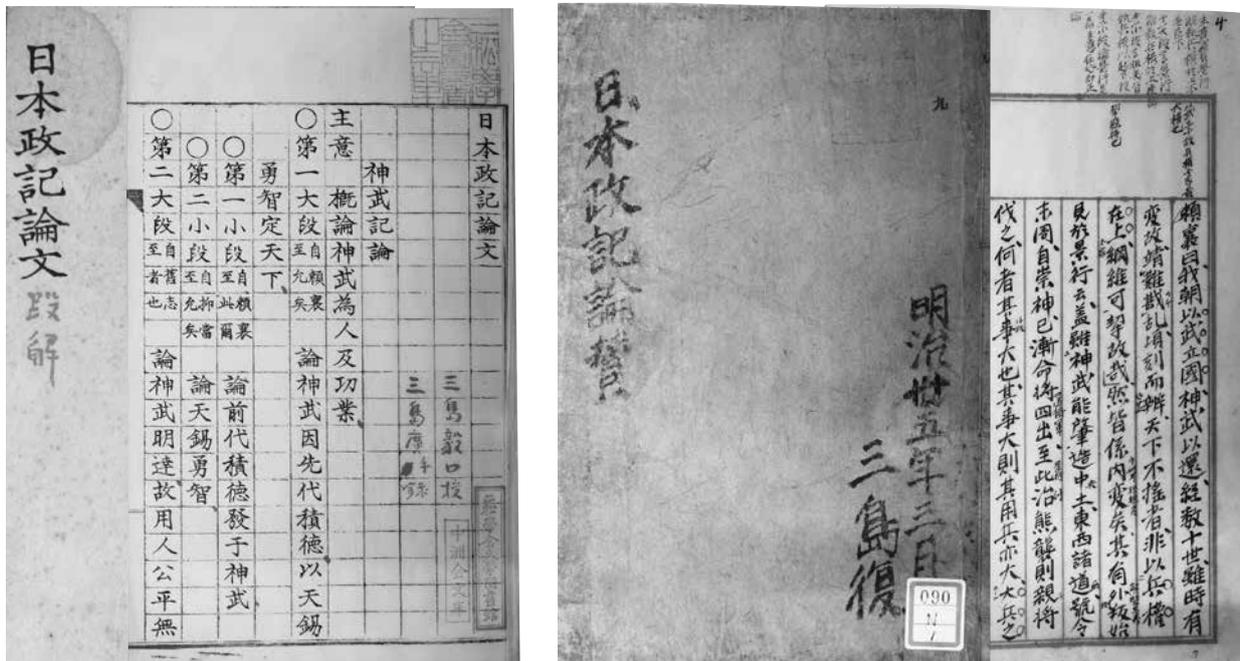
加藤復齋自筆本  
左：『史記論議』 仮綴1冊（復齋533）  
右：『史記論贊講義』 仮綴1冊（復齋536）

上掲の講義筆記をまとめたもの。



29 | 三島中洲著『日本外史論贊』 加藤復齋写本 仮綴1冊 (復齋615)

頼山陽 (1781 ~ 1832) による源平両氏から徳川氏まで武家の盛衰興亡史『日本外史』から叙論、論贊部分を抜き出したもの。眉欄の朱筆書入は中洲の講義時の筆記。

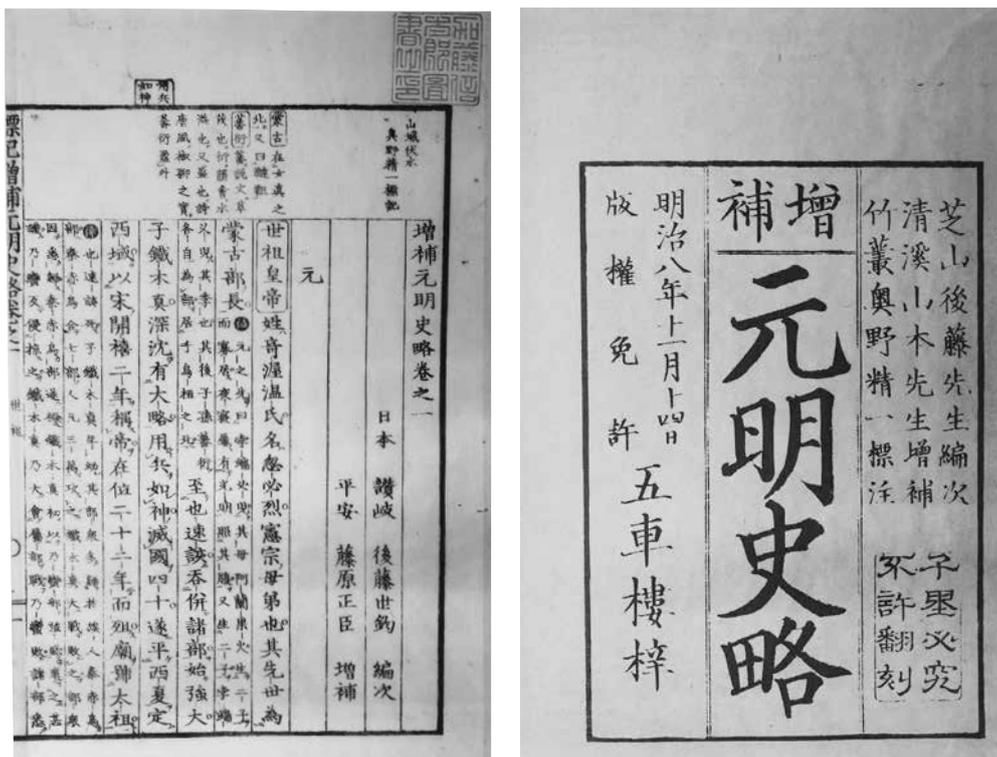


左: 30 | 三島中洲口授 三島廣手録『日本政記論文段解』 写本1冊 (原稿0041)

頼山陽による神武天皇から後陽成天皇にいたる編年体の歴史書『日本政記』(1845刊)を大段・小段に分けてその主意を解説したもの。中洲は漢文講読に際し、この方法を用い、「段解」と名付けた。廣 (1871 ~ ?) は中洲二男。明治25年 (1892)、二松學舎助教となり、のち初代舎長 (1894 ~ 1907) を務めた。

右: 31 | 三島復著『日本政記論贊』 明治35年 (1902) 成立写本 2冊 (和装本0078)

頼山陽『日本政記』から論贊部分を抜き出したもの。



32 | 後藤芝山編次 藤原正臣增補『增補元明史略』4卷

明治8年(1875) 京都藤井孫兵衛刊本 4冊(復斎603)

後藤芝山(1721~82、名は世鈞)による元明2代の歴史書で『十八史略』の続編ともいえるべきもの。宝暦元年(1751)に刊行され、藤原正臣による増補版は享和3年(1803)に刊行された。



33 | 青山延子著 青山延光校『皇朝史略』正編12卷続編5卷

明治15年(1882) 東京青山勇刊本 7冊(復斎607)

水戸藩士青山延子(1776~1843)による神武天皇から後小松天皇までの編年体の歴史書。文政6年(1823)に成立し、初版は文政9年(1826)。

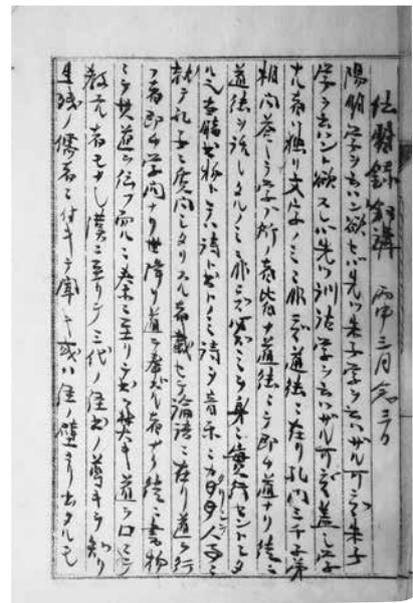
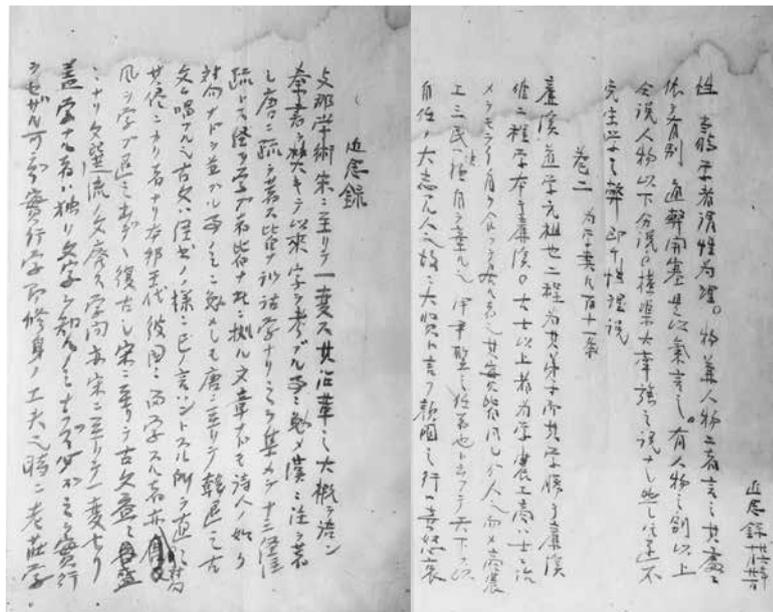
明治20年～30年代、二松學舎における子書の講義は、『荀子』『近思録』『伝習録』『韓非子』『孫子』『老子』『莊子』などが行われ、中洲の講義のほか、『老子』については主に久保檜谷が担当した。



34 | 唐・楊倞注 清・謝墉箋釈 日本・朝川善庵校『荀子箋釈』20巻

文政13年(1830)和泉屋金右衛門刊本 加藤復斎手沢 8冊(加)(復斎202)

書入は中洲の講義筆記に基づくもので、中洲の解説ほか岡松麿谷の説も多引する。復斎の日記に見える中洲の『荀子』講義は明治28年(1895)4月に開講し、始業は朝7時。

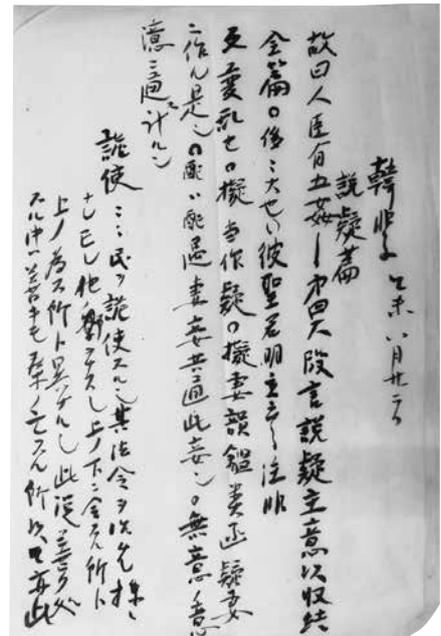


左: 35 | 三島中洲述 加藤復斎録『近思録講義』 加藤復斎写本 1冊(復斎538)

中洲による明治27年(1894)10月の『近思録』講義の筆記。筆記後あらためて清書したもの。

右: 36 | 加藤復斎筆記『伝習録講義』 加藤復斎自筆本 仮綴1冊(復斎539)

明治29年(1896)3月の講義筆記。



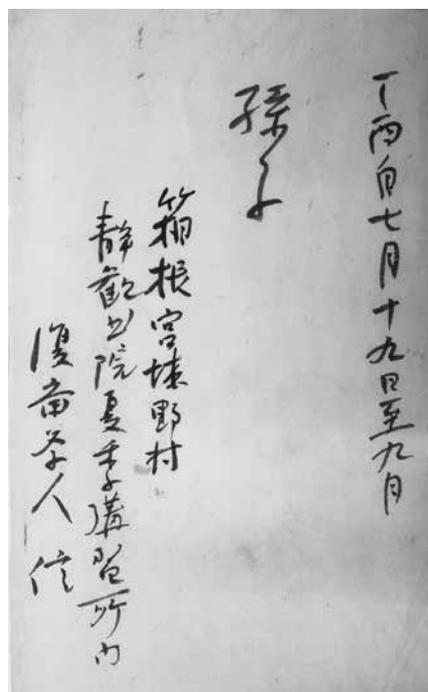
左：37 | 津田鳳卿述『韓子解詁』21卷首1卷末1卷（巻首・巻1、2 闕）

明治期大阪小林伊兵衛後印本 加藤復斎手沢 存9冊（復斎212）

書入は、明治27年（1894）、中洲の講義を録したもので、「第一大段…」と段解の方法をとっていることが見える。

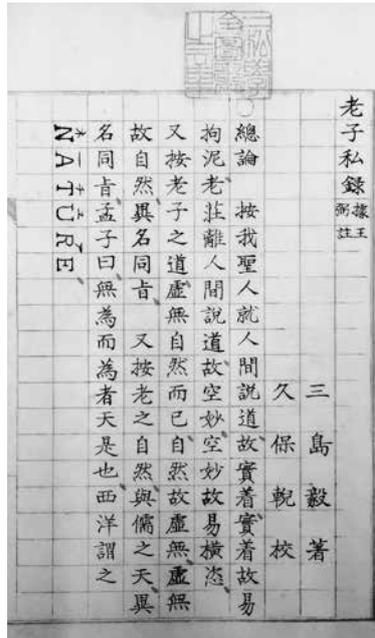
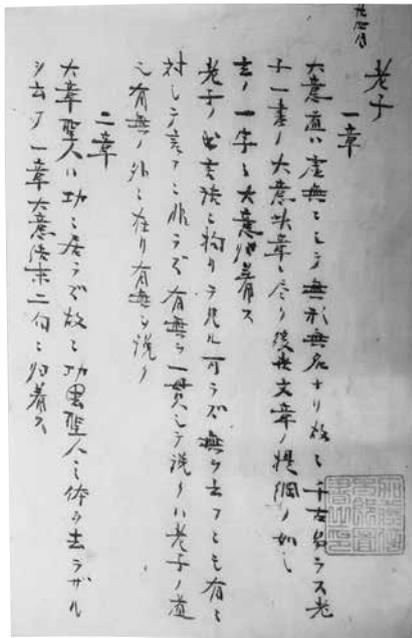
右：38 | 三島中洲述 加藤復斎録『韓非子講義』 加藤復斎自筆本 7葉（復斎540）

明治28年（1895）8月22日、30日、9月5日の講義筆記。復斎の日記にも、朝5時に起きて7時からの講義を聴講したことが記録されている。



39 | 加藤復斎録『孫子講義』 加藤復斎自筆本 仮綴1冊（復斎543）

図版にあるように、明治30年（1897）7月から9月にかけて箱根の静観書院夏季講習所において行われた講義の筆記で、同期間の講義筆記には別に『莊子』が伝わる。二松學舎では7月中旬より8月下旬まで夏季休業となるが、同期間中、毎年夏季講習会が開かれていた。

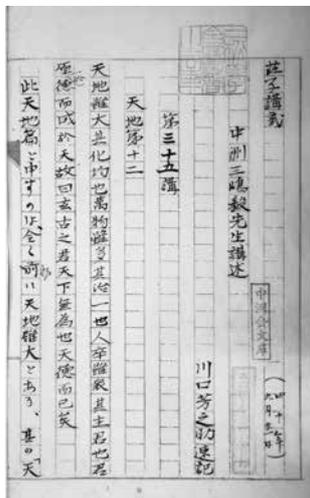
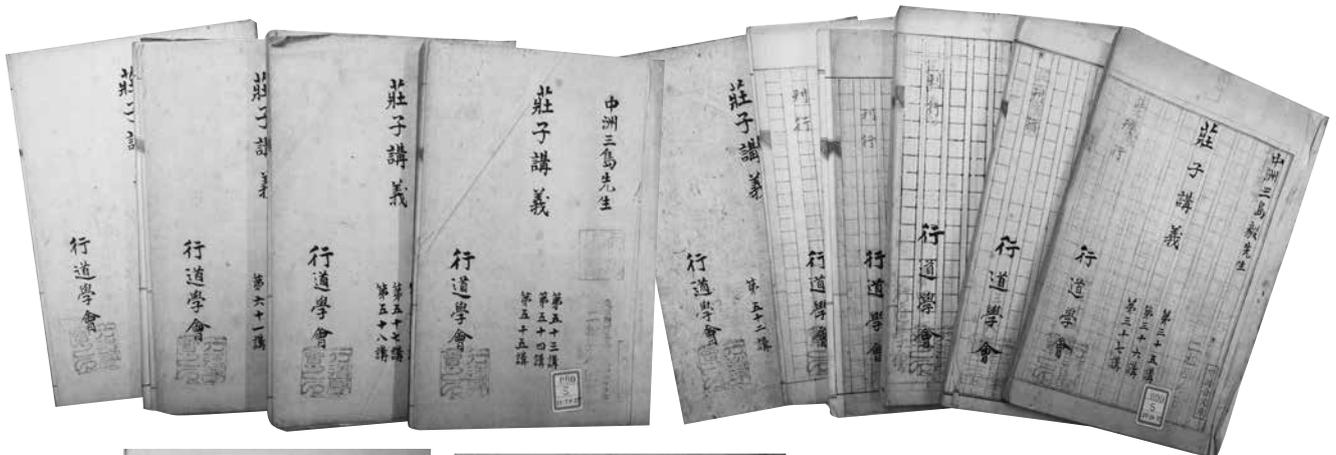


左：40 | 加藤復齋録『老子講義』 加藤復齋自筆本 1冊（復齋545）

講述者、講義年代不明。復齋の日記には久保椴谷の『老子』講義を聴講した記録が頻出しており、講述者は椴谷か。

右：41 | 三島中洲録 久保靦校『老子私録』 久保靦自筆本 1冊（和装本0164）

中洲の「私録」シリーズのひとつ（前出『周易私録』参照）。「拋王弼註」とあるように、基本的に王弼註によるが、諸注も引用し折衷している。

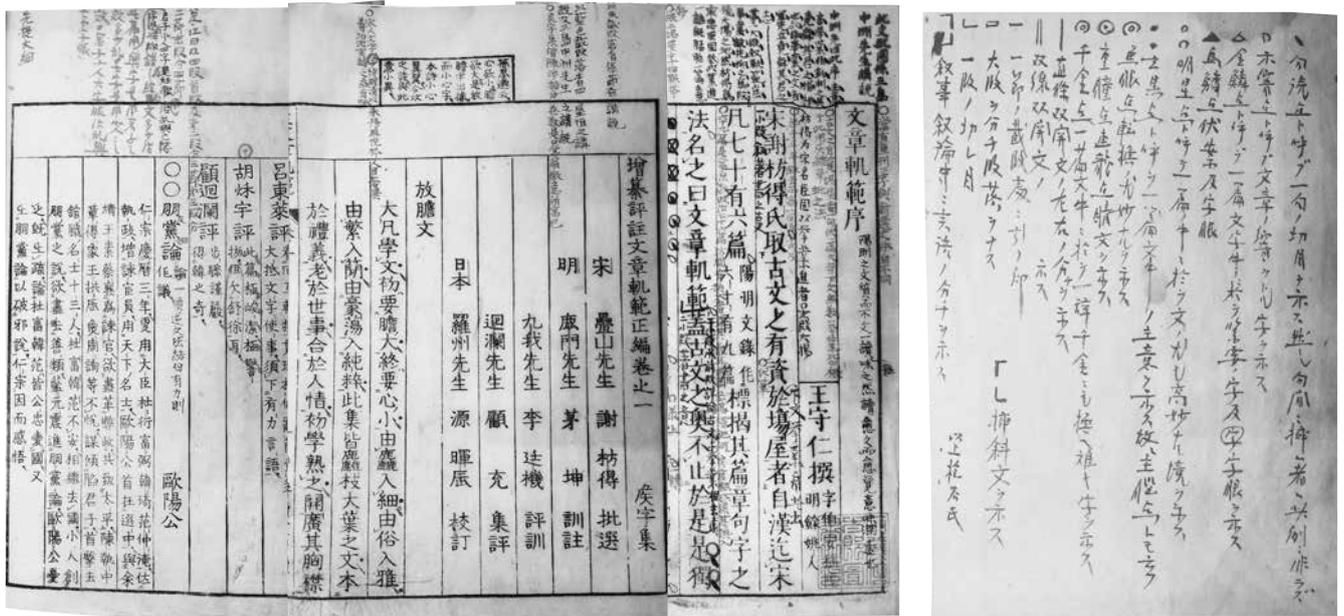


42 | 三島中洲講述 川口芳之助録『莊子講義』

写本 仮綴 10冊（原稿 0021・0022）

行道学会より刊行された中洲『莊子講義』の草稿、第35講から第62講（明治40～45年・1907～12）。第1講は明治37年（1904）に刊行されている。

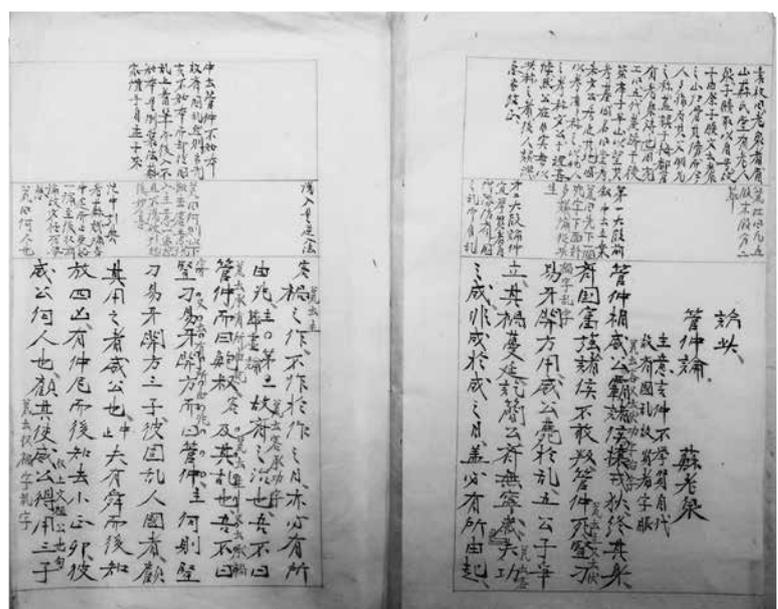
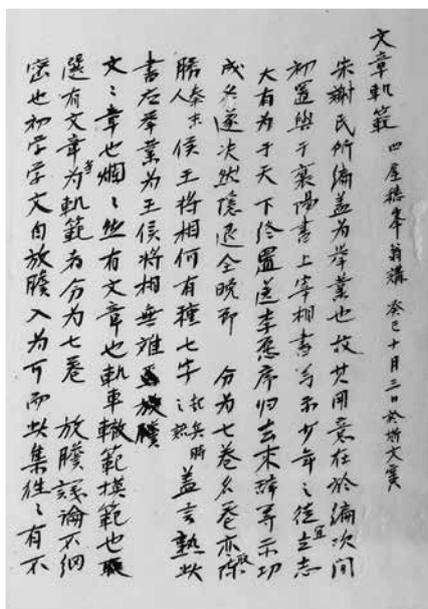
明治期、二松學舎においては『文章軌範』『唐宋八家文』を教材として重用し、主に初等課程の「講読」課目として前者を扱い、高等課程の「子集」課目として後者を扱った。



43 宋・謝枋得輯 明・鄒守益輯統編 日本・松井暉辰校『増纂評註文章軌範』  
正編7巻統編7巻

寛政8年(1796)大坂渋川与左衛門等刊本 加藤復斎手沢 6冊(復斎323)

眉欄、行間の朱藍墨緑の多彩にして詳細な書入は、中洲はじめ森田節斎、四屋穂峰(1830~1906、名は恒之)の講説を色別にしたもので、その他にも川田甕江なども多く引かれる。見返し(上図右)は久保檜谷による読解のための記号。異なる筆蹟は復斎が長年にわたって書入れたことを示すもので、その時期は明治20年代後半から34年(1901)頃である。

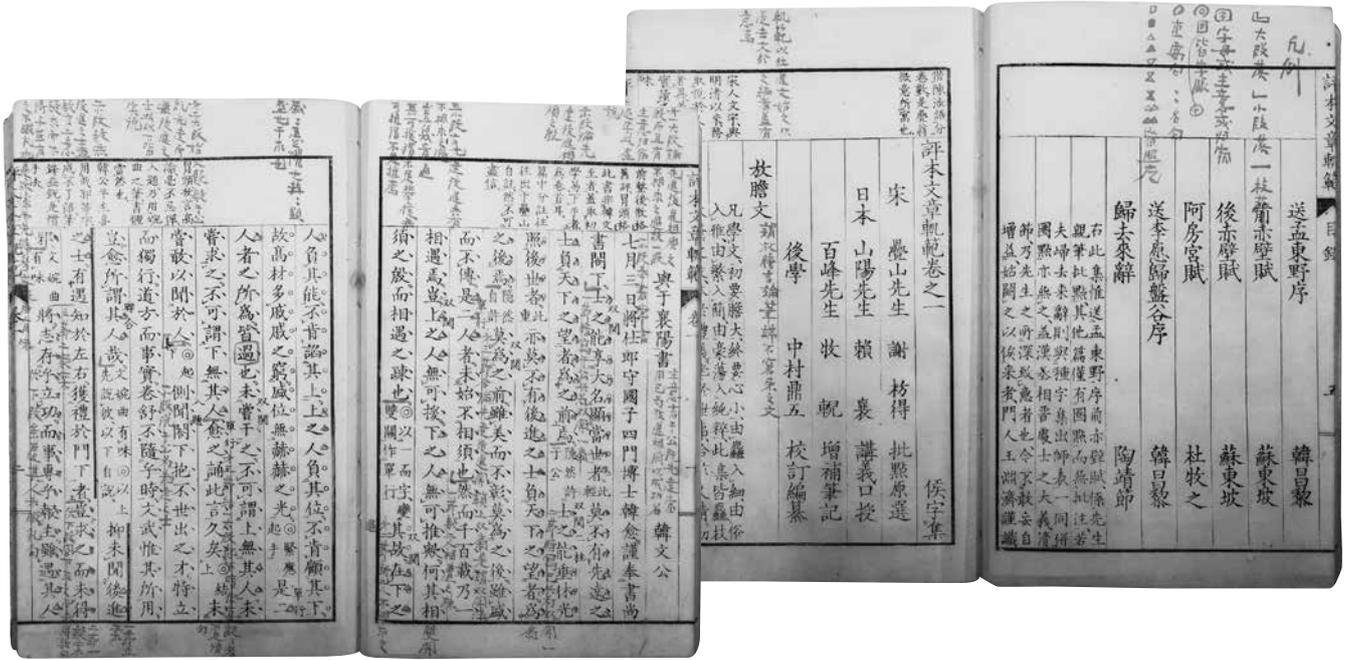


左: 44 四屋穂峰述 加藤復斎録『文章軌範講義』 加藤復斎自筆本 仮綴1冊(復斎553)

明治26年(1893)、斯文齋で行われた講義の筆記。この講義が前出『増纂評註文章軌範』の書入とつながる。

右: 45 加藤復斎録『文章軌範講義』 加藤復斎自筆本 仮綴3冊(復斎557)

書面を三層に区切り、復斎自身が聴講した中洲、四屋穂峰の講義筆記ほか、川田甕江、森田節斎などの説を記し、新たに独自の講義筆記に整理している。



46 | 宋・謝枋得輯 日本・頼山陽講義口授 牧百峰增補筆記『評本文章軌範』7卷

明治 11 年 (1878) 東京龜谷竹二刊本 加藤復齋手沢 2 冊 (復齋 326)

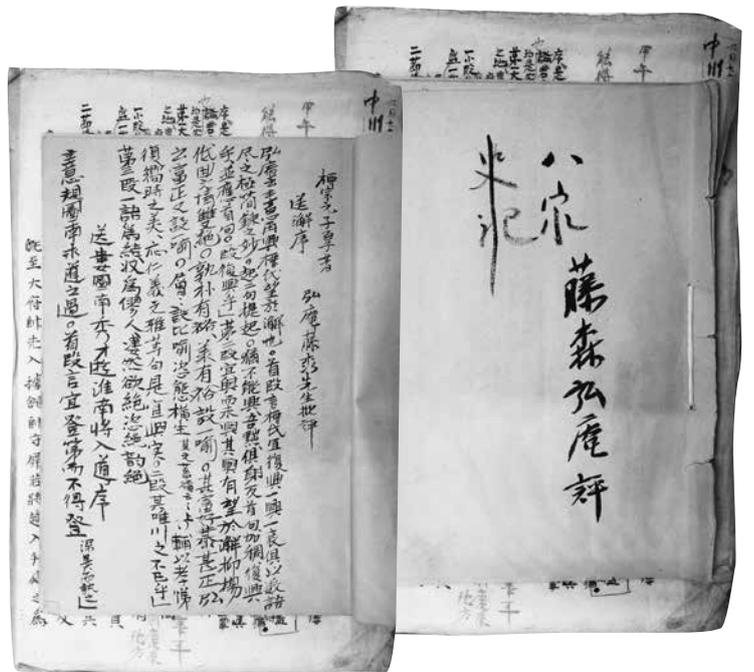
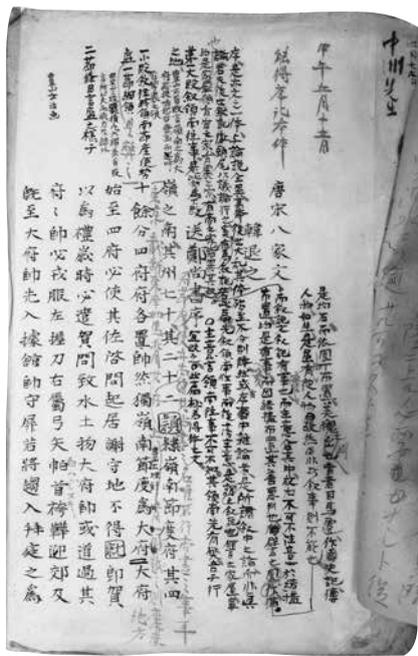
精密な書入は、段解が示されており、中洲の講義に基づくものであろう。「明治卅四年十月二十八日開読卅日夜読了」とある。



47 | 宋・謝枋得輯 日本・海保漁村補註 島田篁村校補『補註文章軌範校本』7卷

明治 27 年 (1894) 大阪岡島直七等修本 加藤復齋手沢 3 冊 (復齋 325)

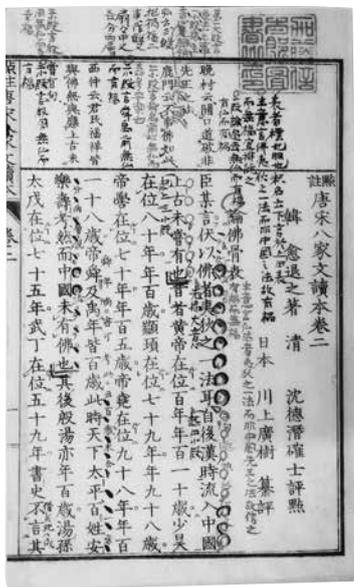
朱筆の書入は、講義時の筆記というより、復齋が自身の覚書として記したものと思われる。



48 | 三島中洲述 加藤復齋録『唐宋八大家文読本講義』・藤森弘庵批評『唐宋八大家文読本』

加藤復齋写本 仮綴1冊 (復齋550)

中洲の明治26年(1893)の講義の筆記録と藤森弘庵(1799~1862、名は大雅、別号天山)批評の『唐宋八大家読本』が合綴されている。



左: 49 | 清・沈徳潜評点 日本・川上広樹評 『点註唐宋八大家文読本』30巻 (巻1、13、14、19、20闕)

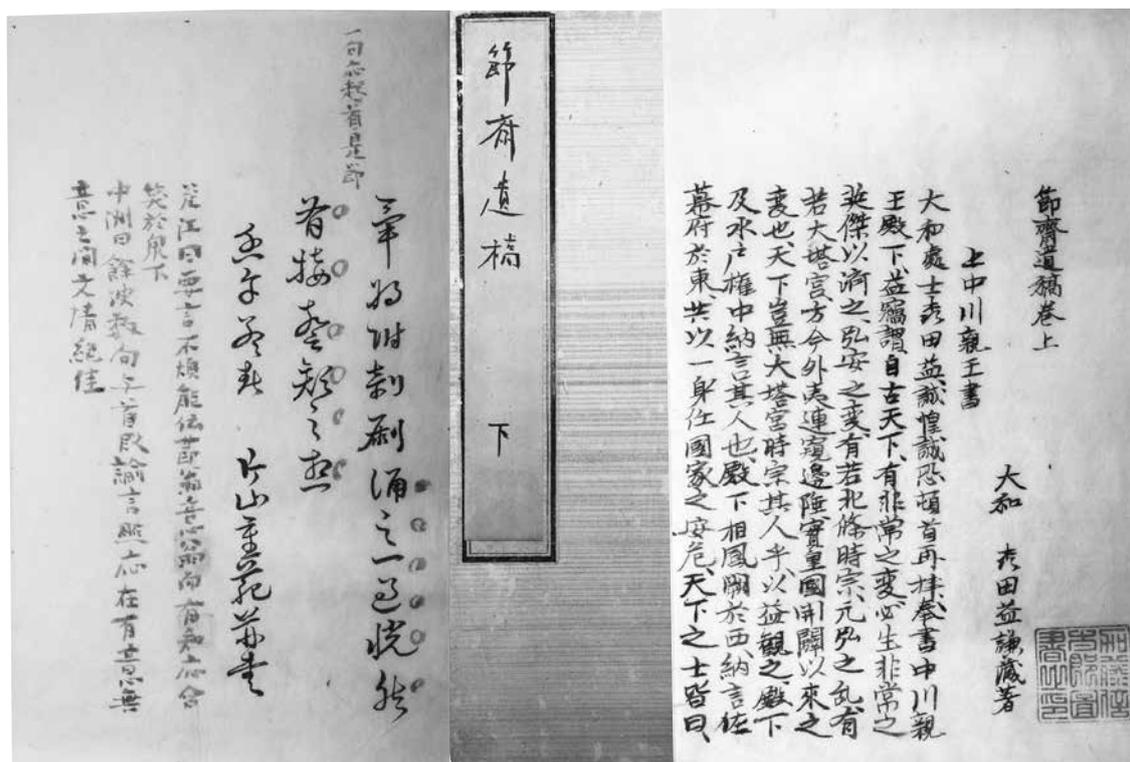
明治18年(1885)東京山中市兵衛刊本 加藤復齋手沢 存13冊 (復齋318)

朱筆書入は、明治26年(1893)の中洲の講義筆記をもととして、墨筆書入には藤森弘庵の説も引かれる。末に「二十六年十二月十日講了」とある。

右: 50 | 清・沈徳潜評点 日本・山崎楽訓点『唐宋八大家文読本』8巻

明治19年(1886)東京敬業書院鉛印本 加藤復齋手沢 4冊 (復齋321)

朱筆書入は中洲の講義筆記を中心として、また墨筆にて久保棹谷の説も引く。



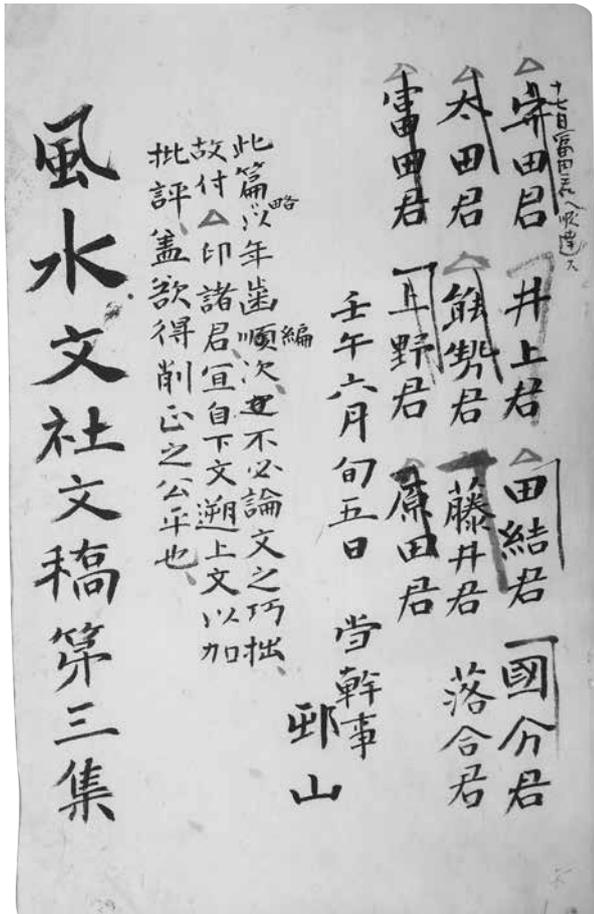
51 | 森田節齋『節齋遺稿』2巻 加藤復齋写本 2冊(復齋426)

『節齋遺稿』2巻は、森田節齋門下の片山猶存が在京の同門四屋穂峰・島田泰夫らと好問会を結成して明治15年(1882)に編纂刊行したもの。展示品はその版本からの重鈔本であるが、「魏孟子牽牛章序」「送頼士剛遊江戸序」「名和公画像記」「原田亀太郎画像記」「左衛門尉楠公髻塚碑」には中洲による講義を反映したと見られる書入れがあり、片山猶存跋にも中洲と川田甕江の圈点と評が加えられている。



52 | 川田甕江『甕江文鈔』3巻 加藤復齋写本 3冊(復齋438)

川田甕江(1830~1896)は三島中洲の同国・同年・同門の親友で、修史館一等編修官・東京大学教授などを経て、宮内省東宮職御用掛を務めた。甕江は明治期を代表する名文家として知られるが、その詩文は出版されず今日に至り、郷里の倉敷市玉島図書館や国立国会図書館等に文稿が写本の形で伝わる。展示品はそれらとは別の体裁を持つ3冊からなる文稿で、第1冊に序22篇、第2冊に記9篇・跋等9篇、第3冊に墓碑12篇を取める。併せて中洲や中村敬宇・依田学海・元田南豊・隄静斎・成島柳北・日下勺水・黄遵憲・重野成斎・森春濤らの評も収録されている。



## 53 『風水文社文稿 第三集』

風水文社は明治15年(1882)二松學舎内の同好者によって結成された漢作文結社で、展示品は同年6月に起稿した第三集。中洲は全く関与しておらず、塾生の自主的な運営に任された組織であったことが分かる。風水文社同人には次のような塾生が名を連ねた。同人の集合写真も残されている(『三島中洲と近代—其三一』参照)。

守田 達雄(号南涯・稷童梁子)

井上 公二(号卓堂・春園、古川財閥重役)

国分 三亥(号蜻州、司法省法学校進学)

太田益之助(名奎、号宕山)

能勢 萬(号思軒、司法省法学校進学)

藤井米一郎(号松村、司法省法学校)

落合 直文(本姓鮎貝、通称亀太郎、号松洲)

富田 某(号黙雷・杏花春雨堂)

上野 常也(号恒斎)

原田 某(号東洲)

村山 幹事(号筑山)

莊田要二郎(司法省法学校進学)

中村破魔二郎

田辺 章彦

## 54 『東海北斗』

(第1号～第57号、1889～1893年)

『東海北斗』は、山田準(濟齋)・本城佐吉(問亭)・池田四郎次郎(蘆洲)らが二松學舎構内に開設した北斗文社から発刊された月刊の漢文雑誌。第1号は明治22年(1889)12月に初版が刊行され、随時バックナンバーの増刊もされている。漢文講義録としては、中洲の「文章軌範講義」「孟子講義」、山田準の「日本政記講義」が収録され、続いて「中洲文詩」、「文林」(諸家詩文)、「叢書」(山田方谷遺著等)が収められている。初期の二松學舎において刊行された雑誌には『二松學舎翹楚集』(1880年)、『二松學舎学藝雑誌』(1881年)があり、有志による詩文結社には上記の「風水文社」や「行餘文社」(1893年～)等があったが多くは永続せず、中洲も参加して明治40年代まで継続したと思しい「細論文社」(1889年～)もその資料は必ずしも完備していない。『東海北斗』の終刊時期は未詳であるが、少なくとも4年近く続いた同誌は、二松學舎のみならず同時代の漢学資料としても貴重である。この後、明治29年(1896)に二松學舎学友会が結成され、『二松學舎学友会誌』が発刊されることによって、二松學舎の永続的な雑誌発行が可能になった。



乙未四月  
 一日朝四時起<sup>六</sup>七時半至七時半  
 聽久保塾頭論語講義七時  
 半至八時半聽中洲先生易經講  
 義午後二時列八家文翰講席  
 右了閑永見某文稿五時半行  
 有信館九時歸塾讀八家文十  
 一時就寢終日晴天夜亦星滿  
 天  
 二日朝四時起不上中洲先生韓  
 非子講筵五時半行有信館九時

在京日志  
 明治三十四年十月  
 一日微陰在塾  
 二日晴在塾  
 三日晴十一時訪鄉友佐藤靜亮君於神田錦街之富  
 午後一時共聽重野成齋論語新古注異同之論高島  
 嘉右衛門周易治斷(高島氏雜滑稽之語以演其說  
 實使人抱腹絕倒)岡本弄庵愛國說(就高島新論  
 岡本氏說慷慨淋漓使人泣滿堂同感拍手喝采

### 55 | 加藤復齋の日記

右：明治24年10月～25年3月・同年10月～11月  
 明治27年1月日記  
 左：明治28年4月～29年4月日記

加藤復齋(名は信太郎)は陸前遠田郡涌谷(宮城県北部)の出身で、明治24年(1891)頃に上京して二松學舎に入塾し、明治35年(1902)頃まで在籍した。次第に頭角を顕した加藤は、明治28年(1895)11月に中洲から房長兼助教を拝命して作文課を担当し、明治35年には塾頭を務めている。後に備前の閑谷中学校や徳島の富岡中学校に教鞭を執った。展示品は加藤復齋が残した日記で、在塾した明治24～同33年(1891～1900)の記録が断続的に残っており、ほぼ毎日聴講や読書などの学習記録が続く。二松學舎における中洲や塾頭久保榎谷・細田劍堂らの講義の他に、斯文学会で南摩羽峰・根本羽嶽・土屋鳳洲らの講義、小石川小日向で島田篁村塾の講義などを聴講したことが知られ、これらの記録に対応した聴講ノートや書入れのある書籍が残されている。

参考資料：久保榎谷(1861～1942、名は雅友、左端上段)と京都支那学の諸氏(久保氏所蔵)

久保榎谷は明治20年代に二松學舎で塾頭等を務めた漢学者で、1908年に京都帝大文科大学の司書となり、1921年に定年したのち、高野山大学等にも奉職。右の集合写真は、京都帝大草創期のもので、前列右から西村天囚、矢野仁一、内藤湖南、狩野直喜、桑原隲蔵、鈴木虎雄、今西龍。2列目右から高畑秀次郎、本田成之、加地菊広、鴛淵一、松浦嘉三郎、内藤雋輔、奥博仁、那波利貞。3列目右から、浦川源吾、井上以智為、高雄義堅、崎山宗秀、神田喜一郎、久保雅友。4列目右から橋本循、藤田元春。



乙酉四月下浣寫於對峰樓 文真山人



56 佐藤一斎肖像画（芳野金陵文庫所蔵、椿椿山原画・1885年柳澤文真模写）「乙酉四月下浣寫於對峰樓 文真山人」

佐藤一斎（1772～1859、名は坦）は山田方谷が従学した幕末の大儒で、二松學舎の学風を特徴づける陽明学の起源は一斎に遡る。一斎は美濃国岩村藩の出身で、同藩主の三男に生まれた述斎が林家養子となったのに従い、林家塾頭となった（のち昌平坂学問所儒官）。「陽朱陰王」と呼ばれる一斎の学問は、陽明学に限らず諸学に及ぶもので、その師承や交流も広がった。方谷が江戸遊学して一斎に入門するのは1834年のことであるが、亡師丸川松隠と一斎が大坂懷徳堂とともに中井履軒に学んだことも入門の一因をなしたと思われる。三島中洲がしばしば中井履軒の注釈を引用するのは、こうした学統を反映するものであろう。展示品は一斎歿後の昌平坂学問所改革によって幕府儒官となり文久の三博士に数えられた芳野金陵の子孫宅に伝えられたもの。

「曾將痛哭勒碑銘 今讀斯詩復失聲 宿草有無何暇問 忽然憶起卅年情」

客死不還東海天 而今東海亦桑田 恥吾曾作同齡友 尚保殘生度幾年

讀三島遠叔題其先考像詩、感愴之餘、賦二絕情見于詩、時己巳歲春二月、為其三十三年忌辰。方谷老夫球齡六十有五。」

三島中洲が14歳で備中松山藩儒の山田方谷（1805〜77、名は球）に従学した一つの理由は、方谷が中洲の亡父寿太郎正昱（1805〜37）と丸川松隱の塾で共に学んだ同学・同年の友人であったからである。展示品は、正昱の33回忌にあたる明治2年（1869）2月に、中洲から正昱の肖像に題する詩を贈られて心を動かされた方谷が中洲に贈った絶句二首。陽明学者として知られる方谷であるが、方谷は普段の講義においては朱子の注によるものが多く、中洲が備中松山藩の財政や外交など「俗務に就て方谷先生に質問し又指導を受け、先生の実地運用の妙の陽明学に本づくことを悟」つたのはずっと後年のことであった。

曾將痛哭勒碑銘  
今讀斯詩復失聲  
宿草有無何暇問  
忽然憶起卅年情  
客死不還東海天  
而今東海亦桑田  
恥  
吾曾作同齡友  
尚保殘生、度幾年

讀三島遠叔題其先考像詩感愴之餘賦二絕情見于詩時己巳歲春二月

為其三十三年忌辰

方谷老夫球齡六十有五



拙堂齋藤先生碑

58 三島中洲撰 「拙堂齋藤先生碑」 (掛軸卷子0017)

三島中洲の津藩遊学は、斎藤拙堂(1797-1865、名は正謙、字は有終)の56-60歳の時に当たる。拙堂は昌平坂学問所で古賀精里に学び、また京都で頼山陽と交流して、『拙堂文話』等の著作によって文章家として知られるだけでなく、海防や経世に関する著作も多く、国際情勢に高い関心を寄せた儒者である。中洲は備中松山藩における修学時すでに拙堂の『海防策』を筆写しており、そのことをよく承知していた。津藩士ではない中洲は藩校有造館に学ぶことはできず、藩士川北梅山らの好意によって藩校蔵書を閲覧し、また城北茶磨山下の拙堂の山荘で定期的に拙堂の添削を受けながら勉学を続けた。展示品の「拙堂斎藤先生碑」は、かつて中洲に從学した拙堂の孫正彰から、拙堂の50年忌に当たって依頼されて撰文したもの。

拙堂先生捐館之五十年嗣孫正彰東穀曰祖考碑銘託門人土井有恪有恪尋物故今也非屬諸子則其行實終湮滅嗚呼敦厠先生晚年門未而既耄若不應之恐背師恩乃取捨同門中內博所撰小傳叙其梗概曰先生諱正謙字有終稱德藏拙堂鐵研拙翁皆其別號系出齋藤實盛同族其裔住伊豆三島世為望族至正親入江戶任津藩侯藤堂氏是為先生祖父父諱正修木姓增村入贅齋藤氏寬政九年某月某日生先生於藩邸幼而穎悟稍長入昌平學師古賀精里刻苦勉學最用力古文卓然已成家及藩主誠德公創建國學擢先生學職因從津時年二十四偶遊京師訪賴山陽山陽初學生視之及觀其文大驚延之上座遇以朋友文政中任講官食祿百五十石既而誠德公逝詢差公嗣年甫十二命先生兼侍讀先生左右啓沃十數年學德大進他日博賢名者其力居多加祿至二百石又屢扈從江戶與諸名士交聞見益博聲名愈顯天保十二年轉郡宰銳意欲除民害摘發大里正森曲者數人黜罰之民大悅然未及展其力再入學參署督學事弘化中陞督學總統文武學政乃立學則廣購書籍刊行資治通鑑又設場練兵學政大振人材輩出諸藩士聞風來學者常數十人安政二年德川大將軍辟先生賜謁將擢任儒官先生謂吾事藩侯三十年言聽謀用寵遇日加去之而就一身之榮情所不忍遂謝病西歸藩侯出迎于郊外增祿為三百石督學如故六年先生致仕長子正格襲祿別給先生十五口糧為養老資先是先生營別墅于城北茶磨山下倚山俯海眺曠絕佳亭榭堂房參差難立於花木泉石之間以為公暇偃息之所至此移居棲賓客引書生文酒風流以送老藩侯亦時來臨有所諮詢云慶應元年七月十四日病終享年六十有九葬四天王寺先隴私諡曰文靖前室鈴木氏生一男而歿正格是後室高畑氏生三男四女二女適淡木氏及七里氏餘皆天正格男即正彰曾在教門今守家教授鄉學先生面斑痘痕大耳並背對坐先見雙采感容可畏而胸宇豁朗推誠接物愛才如渴識見明達學通古今經義奉宋儒而不墨守深疾頭巾陋習史子諸集淹貫該涉及邦典洋籍欲用之經世實務而中年一試未逞其志發論策者足以見抱負嘉安之間山陽已亡佐藤一齋亦老天下文章獨推先生隱然為幕末文宗詩則少壯不用心晚與梁川星巖廣瀨旭莊等交互評騭切劘頗有所獲藏家殺入先生門實嘉永五年先生未致仕話月潮記勝海外異傳已刊行北島國司紀魯魯西亞外記兵話等十數部猶藏家殺入先生門實嘉永五年先生未致仕月數次遊別墅殺輩就請益凡五年聲歎猶在耳而幽明杳然標筆不能以不文作銘曰

先生之文 冠絕一時 格律森嚴 光彩陸離 述往聖則 扶植常彝 策當世則 剴切機宜 劉切機宜

記事傳人 韓柳維師 銘墓序書 歐蘇維規 蘇潮韓海 一望絕奇 景如文處 是先生碑

大正四年十二月 受業弟子宮中顧問官從三位勳一等文學博士三島毅謹撰 門人東京女子高等師範學校講師岡田起作敬書

東京 井龜泉刻

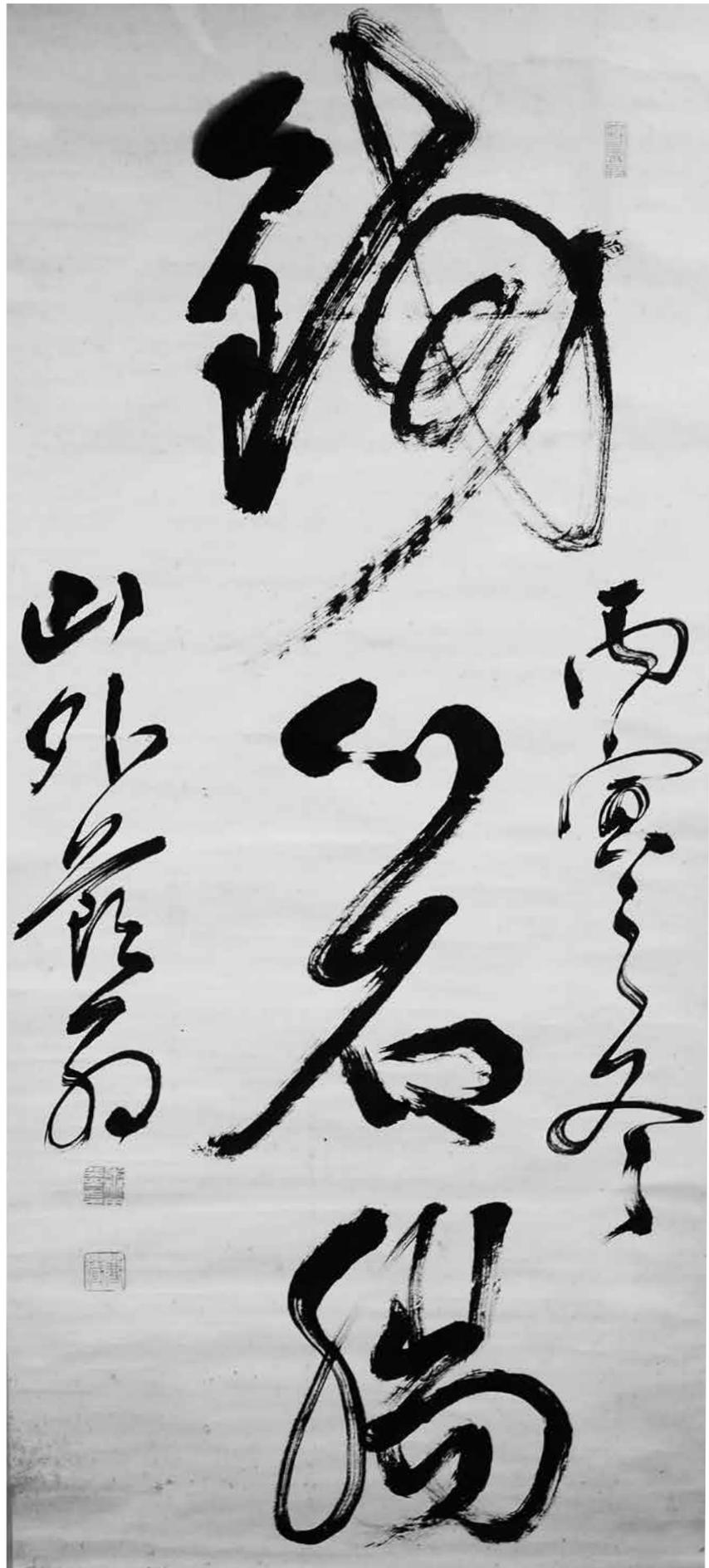
式部官從四位伯爵藤堂高紹篆額

☆  
59

土井聳牙画墨竹（1873年3月作） 「癸酉維莫之春画於對山亭上 土井恪」

土井聳牙（1818～80、名は有恪、字は士恭）は齋藤拙堂・川村竹坡らに学んだ津藩の儒者で、中洲の津藩遊学时に文の添削等を通して教えを受けた人物の一人。津藩では賓師猪飼敬所が出版事業に着手した『資治通鑑』の版木を買い取って事業を継承したため、史学が興隆した。その学風を受けた土井聳牙は考証学や史学に長じ、中洲もこうした学風を受け継いだことは、遊学中の所著に『漢書百官志図』『明史職官志図』『温史通論』『明史名臣及宰相品第』等があることから分かる。展示品は土井聳牙が好んで描いた竹の絵で、その竹を描くことだけを論じた『論画竹偶筆』も残している。「近人竹を画きて多く筆墨を成さざるは、本より書法を講せざるの然らしむるところ」という画論の通り、本作は聳牙の藏鋒を用いた書法と同様の筆法を感じさせ、まさに文人の画と呼ぶにふさわしい。





☆  
60

森田節齋書幅（1866年） 「丙寅之冬／鐵心石腸／山外節翁」

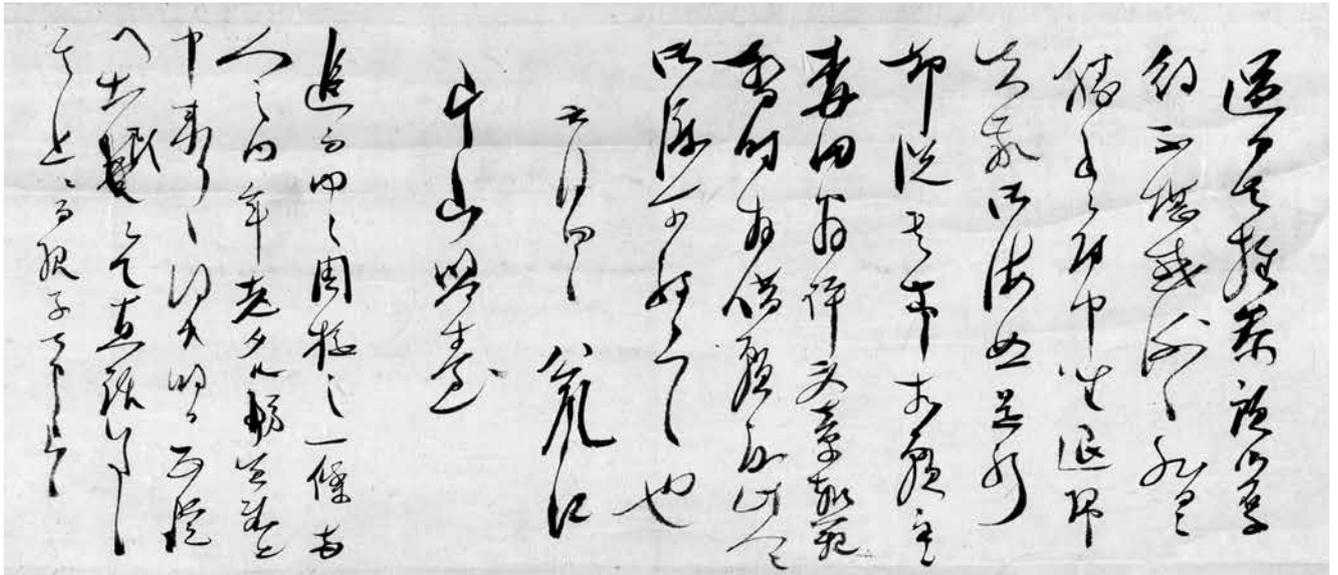
森田節齋（1811～68）は初め猪飼敬所・頼山陽らに学び、また江戸で昌平黌に学び安井息軒・塩谷宕陰らと交流し、京都・備中・備後など各地で漢学を教授した。強烈な個性と独特の風格をもった人物で、門下から吉田松陰・久坂玄瑞・原田亀太郎（天誅組に参加）等の活動家が出ている。若い頃の三島中洲も詩文の添削を請うなど交流を持ったが、中洲は後年その教授ぶりを評して「所在以文章氣節鼓舞生徒、生徒多慨世憂国、不事章句（あちこちで「文章」「氣節」によって生徒を鼓舞したので、生徒たちの多くは国の現状を憂い、学問に努めなかつた）」とやや批判的に述べる。しかし頼山陽の系譜に属するその文論には傾聴すべきものがあつたようで、次に掲げる片山猶存宛て書簡が示す如く、川田蕨江や中洲は節齋加評の「文章軌範」を重んじた。

61 片山猶存宛書簡幅 (新収資料)

(上から a 川田甕江、b 阪谷朗廬、c 三島中洲、d 坂田警軒、e 進鴻溪、f 西薇山、g 池上秦川)

片山猶存(1838-1895、名は重範)は岡山藩領の備前国津高郡下加茂村(現吉備中央町)に出生し、倉敷の簡塾で森田節斎に学び、明治2年に郷里に開塾、翌年岡山藩庁から召されて士族となり、更に藩から推挙されて新政府の民部省の貢士候補として東京に遊学した。明治5年、片山は35歳で大蔵省租税寮に出仕し、内務省地理寮八等出仕に転じ、地租改正の実務を担当した。後に栃木県・山形県などの地方官を歴任している。漢学に造詣が深く、在京の森田節斎門下の人々と詩文結社(好問会)を結成して『節斎遺稿』を編纂刊行した(1882年)。その歿後、甥で門人の平野猷太郎らによって『猶存遺稿』(1898年刊)も編纂されている。平野は高梁出身で、二松學舎・帝国大学法科に学んだ法曹として知られる。

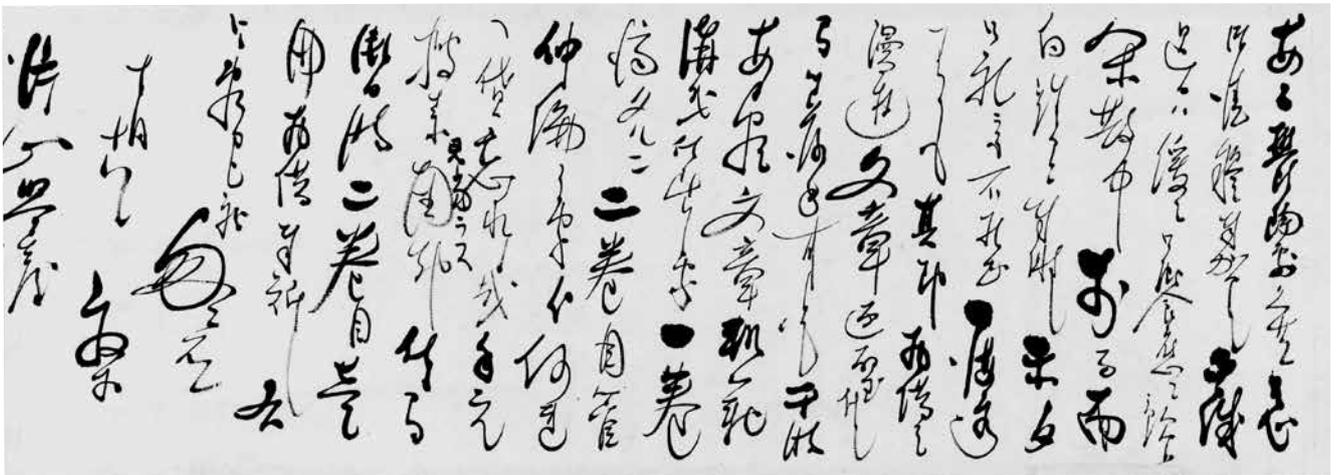




61a | 片山猶存宛川田甕江書簡 (明治7~同10年6月4日)

川田甕江から片山猶存に、森田節齋が評を加えた『文章軌範』の借用を依頼した書簡。

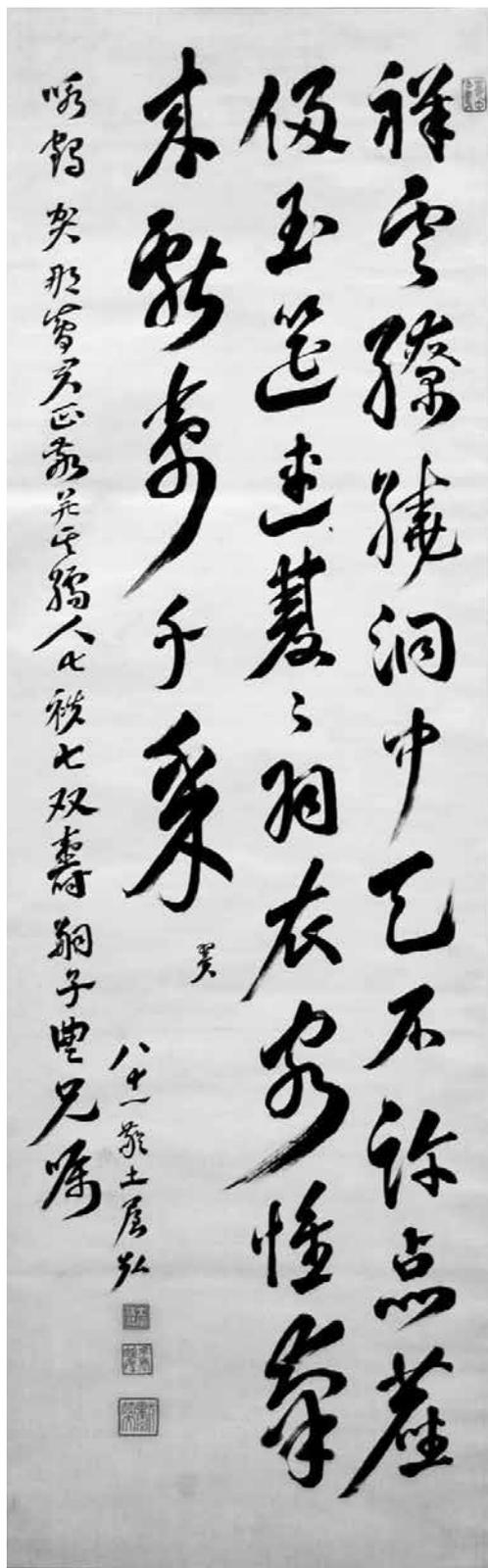
(釈文)「過日は推参、預御厚待、不堪感謝候。然るニ勝手ニ付中坐退帰、失敬御海恕是祈。却説、其節相願置候森田翁評文章軌範、暫時拝借願度、此人ニ御渡可被下候也。六月四日 瓮江 片山盟臺  
追而内々周旋之一條、兩人之内、年老タル方宜敷と申来候得共、明日正院へ出頭にて直話いたし、其上ニ而様子可申上候。」



61c | 片山猶存宛三島中洲書簡 (明治某年10月18日)

『文章軌範』2巻目の借用を依頼した書簡。この頃の三島中洲は、毎朝、二松學舎において『文章軌範』を講じていたが、巻1を講了し、巻2が手元に見当たらなかつたため、近所の富士見町に住んでいた片山猶存にその借用を依頼した書簡。

(釈文)「毎々鬱陶敷候へ共、愈御清穆奉賀候。于誠過日ハ緩々御饗応ニ預り、閑散中別而面白、難有奉謝候。未夕御礼ニも不罷出、御海容可被下候。其節拝借之漫遊文章、返璧仕候間、御落手可被下候。于時、毎朝文章軌範講義仕居候處、一卷済タルニ、二巻目管仲論之處より何れへ貸忘れ候哉、手元捜すに見当ラス、困却仕候間、暫時二巻目壺冊拝借奉祈候。右御頼申上度、勿々不一。 毅拝 十月十八日 片山盟臺」



62 土屋鳳洲書幅「吟鶴」(1922年、掛軸卷子0077)

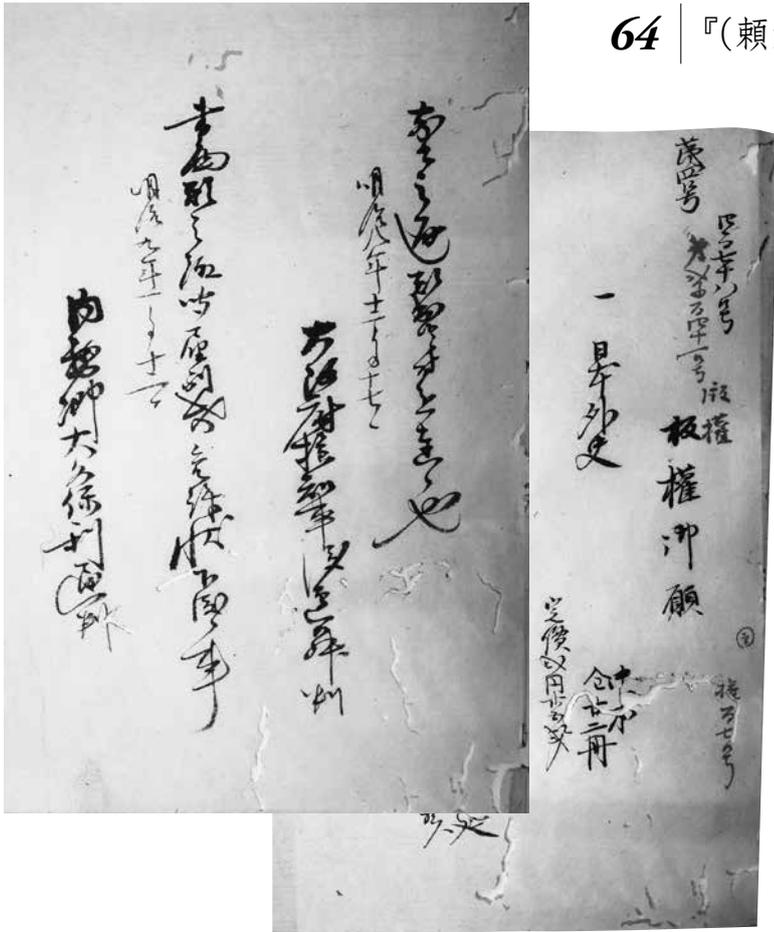
「祥雲繚繞洞中天 不許点塵備玉筵 連賀雙々羽衣客 惟南來獻寿千年  
 吟鶴 賀那智君正敬并其孺人七秩七双壽 嗣子典兄囑 八十一齡土屋弘」  
 土屋鳳洲(1842~1926、名は弘)が三島中洲の高弟那智惇斎(1876~1969、名は佐典)の父母の77歳を祝った七言絶句。土屋鳳洲は池田草庵・森田節齋・阪谷朗廬らに学び岸和田藩校や堺県・大阪府の師範学校の教官を歴任した漢学者。1893年に上京して片山猶存・坂田警軒らと漢詩文結社淡如会を結び、また三島中洲とも親交を持って、二松學舎の夏期講習会等にも出講した。

63 細田劍堂書幅「七十自述」(1927年、掛軸卷子0108)

「世途艱險志多違 賦性頑鈍疏見幾 一事思量聊自慰 人生七十古來稀  
 七十自述七首之一 劍堂謙」  
 細田劍堂(1858~1945、名は謙蔵、別号東郷)は鳥取県久米郡北谷村(現倉吉市)出身で、漢学と書道と剣道に優れ、明治19年(1886)ごろから二松學舎の塾頭・助教・幹事などを務めて三島中洲を補佐し、中洲がその学力と行動力を最も信頼した門人である。後に東京高等師範学校教授等を歴任した。明治30年代に漢学復興運動や二松義会の開設に尽力したが、後年は二松學舎と距離を置いた。著書に中洲の解釈法を継承した『文章軌範詳説』(1892年初刊、1917年再刊)がある。



64 『(頼山陽日本外史日本政記版權關係書類)』



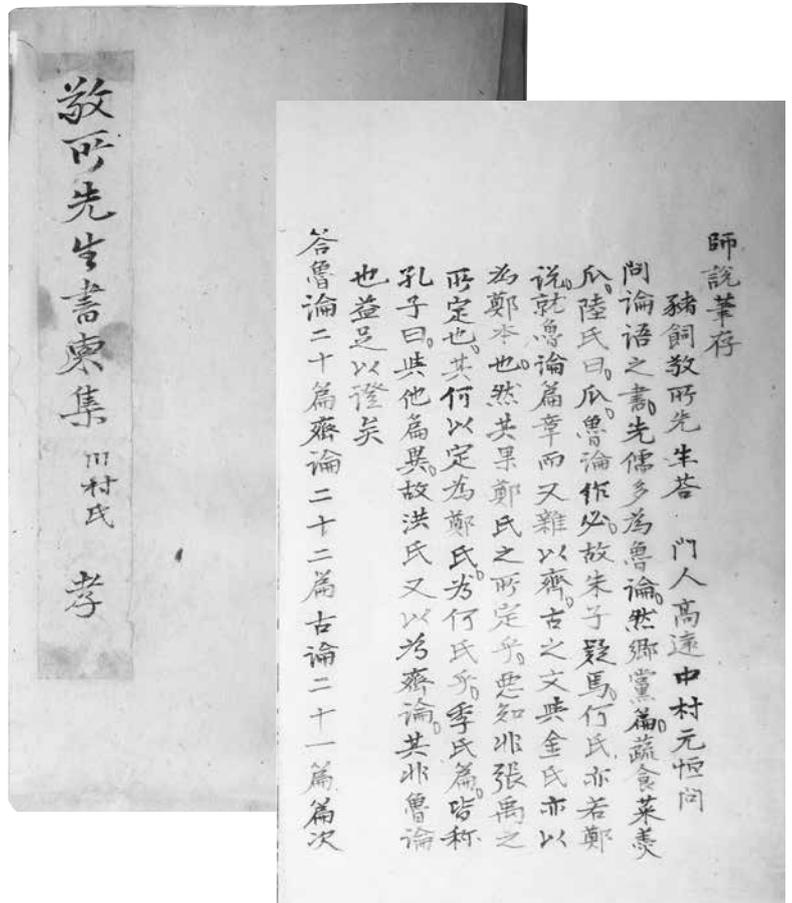
(三島文庫)

多くの明治期漢学塾においてそうであったように、二松學舎においても『日本外史』『日本政記』は『十八史略』等と並ぶ初級テキストとして頻繁に講義されていた。展示品は、『日本外史』その他、頼山陽(1781～1832)著書の版權に関する文書を綴じたもの。幕末期の山陽遺子支峯復二郎・鴨崖三樹三郎と書肆河内屋吉兵衛の間の文書に始まり、出版条例(明治8年)によって内務省図書局が版權を所管するようになった明治8～9年(1875～76)の時期の文書までを収録している。司法省官吏として民法の制定に関与した三島中洲の旧蔵にかかると見られる。幕末明治期において頼山陽『日本外史』は最も普及した史書であり、普及した川越藩蔵版の他、頼家蔵版、清国版、評注本、活版など夥しく、版權をめぐる係争も起きていた。

65 猪飼敬所『敬所先生書柬集』

(竹清馬越文庫 551872～7)

猪飼敬所(1761～1845、名は彦博)は京都出身で、皆川淇園門下の巖垣龍溪に学び、その儒学は古学を基礎に古今を折衷し古注学とも称される。その学問の範囲は博く経・史・子に及び、多くの著作を残している。津藩から賓師として聘されたため、その学風が三島中洲の遊学した津藩に伝えられた。本書は、猪飼敬所の門人たち(谷三山・川村竹坡・平松楽斎・足代弘訓・中村中倮・吉田公寛)が敬所と学問に関する質疑応答の交わした書簡を編集したもので、敬所の学問を知るとともに、天保前後の學術の状況を窺う好資料。本書は『日本藝林叢書』『日本儒林叢書』に収録されている。二松學舎大学図書館所蔵の竹清馬越文庫コレクションの収集者である三村清三郎(1876～1953)は、伊勢出身であったため、そのコレクションは『伊勢人物志稿』など伊勢に関するものが比較的多い。



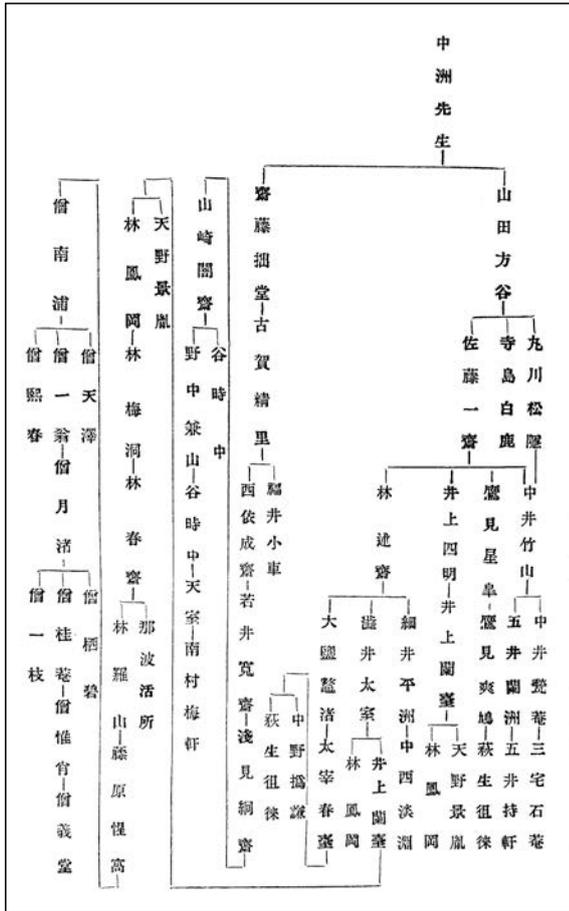


# 編集後記

当初三年計画で着手した企画展「三島中洲と近代」は、幸い好評を博して、今回「其五」の展示を行うとともに図録を刊行することとなった。今回の展示は「二松學舎の漢学教育」と副題し、経史子集にわたる講義筆記など中洲が二松學舎で行っていた講義の内容がわかるような資料を中心に展示した。これほどの量の中洲の講義筆記が展示される機会はこれまでなかったと思う。ぜひ学内外の大勢の方々には足を運んでいただきたい。▼今回も、展示と図録作成に当たり、館長はじめ図書館の諸氏、丸善の山崎和正氏に多大なご協力をいただいた。あらためて謝意を表したい。また企画展に合せて、一月二六日（土）には清水信子氏と小職による展示解説と講演会も予定している。大勢のご来聴をお願いしたい。

平成二九年一月二〇日

文学部教授・大学資料展示室運営委員 町 泉寿郎



▶参考資料  
河野宇三郎作成 三島中洲学系図（二松學舎学友会誌三三輯所収）

二松學舎創立一四〇周年記念  
平成二九年度 二松學舎大学資料展示室 企画展図録  
**三島中洲と近代** —其五—  
——二松學舎の漢学教育

発行日 平成二九年一月三〇日

編集者 大学資料展示室運営委員会

発行者 二松學舎大学附属図書館

〒一〇二—八三三六

東京都千代田区三番町六一一六

印刷  
製本 株式会社 サンセイ

